



鉛筆を横にくわえると楽になる、正しい姿勢で学習効率が向上する、など興味深い実験結果から身体が心に及ぼす影響を多数紹介。自然科学的思考への導入に。(『精選国語総合 新訂版』)

学ぶ楽しさは柔軟性を生む!?



池谷 裕二
いけがや ゆうじ

一九七〇（昭和四五）年生まれ。脳研究者。東京大学薬学部教授。主な著書に、『進化しすぎた脳』『単純な脳 複雑な「私」』『脳はなにかと言いつくす』『ココロの盲点』『脳には妙なクセがある』など。

子どもたちが夢を持たなくなったとよく聞きます。しかし、それは悪いことでしょうか。

将来の進路選択には大きく二つの方法があります。一つは目的主導的選択です。何をしたいのかという目標を立てて、そこに向かって進んでいくという方法です。もう一つは消去法的選択です。あちらに進んだら失敗しそうだ、こちらに行ったら苦勞しそうだと思案して、残った安全そうな道を選ぶという方法です。目的主導的選択と消去法的選択では、どちらが大切でしょうか。

答えは「どちらも大切」でしょう。夢ばかりが大きくて、その夢のスケールに自分の才能がついて行かず、結局は周囲に迷惑をかけるような人生を送ってしまった、褒められたことはありません。ときには慎重な視点に立ち、消去法的な選択戦略で、自分にふさわしい人生計画を練ってみることも必要です。

ただ私は思うのです——この二つの選択方法だけでは、まだまだ視野が狭いと。

米デューク大学のキャシー・デビットソンが米紙『ニューヨーク・タイムズ』に寄せた論説が反響を呼びました。「今の小学生の65%は将来、現在は存在していない職業に就く」という統計予測です。言われてみれば私も、小学生の頃には（いや中高生の頃ですら）経営コンサルサントやIT系技術者がこれほど花形職業になるとは思いもよりませんでした。

つまり、子どもたちが「将来の夢を抱く」ことは、現在存在しているわずか35%の選択肢に自分を制限することに相当します。本当ならばまだまだ自分には潜在性があるのに、限られた可能性に自らを幽閉するのは惜しいことです。

また、厚生労働省が発表したデータによれば、現在は50%以上の人は転職を経験するそうです。憧れの仕

事に就いても、その仕事を生涯やり遂げる人は半数以下なのです。となれば「現在の動機（＝夢）」は、当人が考えているほど重要でないといえます。

ここでイェール大学のウルゼニフスキー博士らが一昨年に発表した調査結果を紹介しましょう。博士らは米国陸軍士官学校の候補生一万人以上を調査しました。陸軍士官を志した理由についてアンケートを取りました。「軍隊そのものが楽しいから」と内部動機を挙げる人もいれば、「出世したい」「国のために」「家族を守るために」と手段的動機を挙げる人もいます。

そんな候補生たちが、その後いかに成功したかを、将校に就役できたかを基準に判定したところ、内部動機の高い人の方が、低い人よりも将校になる率が1・五倍高いことがわかりました。これは予想通りでしょう。ところが面白いことに、たとえ内部動機が高い人であっても、手段的動機を多く持っている場合、将校になる率が20%も下がっていました。

単純に考えれば、やる気を維持するためには、目標や夢は多いほどよいと考えがちですが、実際は逆です。「単に好きだからやっているだけ」という人が、最終的によい成果をあげるのです。

つまり、子どもたちにとって本当に大切なことは、

具体的な夢を持つことでは決してなく、将来どんな世界がやってきても、臨機応変に対応できる柔軟な適応力を準備しておくことだと、私は考えます。

そのためには、では、どうしたらよいのでしょうか。私は「今おもしろいと思うことをやり続けよう」と伝えたいと思います。いや、「学校の勉強は面白くないぞ」と反論されそうです。しかし、そうとは限りません。実際には、学問につまらない分野はないはずです。どんな対象であっても、究めていけばその奥深さがわかり、その面白さに気づきます。知れば知るほど楽しくなります。つまり「つまらない」と嘆くことは「私は無知だ」と宣言していることと同じです。

だからこそ、教育とは子どもたちに「学びの面白さに気づかせてあげる」ことだと思います。これができない教師自身まだ学問の面白さに気づいていないのです。

教育者は、つい、「こんな風に育って欲しい」と子どもに期待しがちです。しかし、教育とは、先生や親の願望を満たすことではありません。むしろ親や先生がいなくても独立した人間として立派にやっていけるように成長してもらうことです。未来への順応力は、学びの楽しさから生まれるはずで



幼い頃から「私」と姉はおそろいのコートを着ていた。コート1枚ずつに、姉と姉のお下がりを着ていた「私」が共有した時間や思い出が、小さな跡として残っている。(『国語総合 改訂版 現代文編』)

お下がりについて

私には兄弟はいるが血縁の姉妹はいない。小さい頃は「お姉ちゃん」のいる友人が羨ましくてしょうがなかった。早く母が姉を産んでくれたらいいと願っていたのは二、三歳の頃だったと思う。が、母が女の子を産んだとしてそれは自動的に自分の妹にしなければならないということに（さすがに）気づき、愕然とした。世の中にはどうにもならないさだめというものがあるのだと初めて思い知った瞬間だった。

けれど、兄弟にしろ姉妹にしろ、同胞（はもろ）というものは、小さな頃は、親よりも一緒にいる時間が長い。同じ両親を持ちながら、こうも違う人間が生まれてくるのか、というほど兄弟姉妹、それぞれ違った性質を持つているように見えるケースもあるが、そういう場合ですらどこか——当人たちがどう思おうと——他人には「その家族らしさ」という共通項が見えるものだ。同じ家のトーンというものが、家庭内で響き合っているのだ

て、衣服を貰い受ける、ということがあるとしたらどうだろう。人生の先輩からの経験知を引き継ぐことの儀式として、「お下がり」があるのだとしたら。そしてお下がりを踏み越えつつ、人は自分自身になっていく。

「コート」を書くにあたっては、そういう思いがあった。まったく同じデザインの服が、繰り返し繰り返し与えられるということで、その象徴性が際立つような気もした。

毎年毎年そういう儀式を繰り返してきた姉妹は、そういう経験のない兄弟姉妹よりも、おそらく精神的に深く結びついているのではないだろうか。

知人に、カナダに住む従兄を持つ人がいて、親同士が仲のいい姉妹であつたらしく、小さい頃から一年に一回、クリスマスプレゼントと共に、知人へ向けてその年の「お下がり」が、ダンボール箱に入って送られてきたという。そのカナダの従兄の名はケンといい、知人は、

「自分の中に、いつも自分より大きいケンがいた。膝のところが少し傷がついたズボンとか、何度も洗って柔らかくなったシャツとか。最初に手を通すときに、その持ち主だったケンを感じるんだ。不思議なもので、

なしき かほ
梨木 香歩
一九五九（昭和三四）年生まれ。作家。『西の魔女が死んだ』『岸辺のヤビー』などの児童文学や、フアンタジーを盛り込んだ叙情的な作風で知られる。主な著書に、『裏庭』『家守綺譚』『沼地のある森を抜けて』『海うそ』など。

ろう。結果的には同一の戦場で敵になったり味方になったりしながら、子供時代をともに作り上げていく戦友のようなものになっていくのだろう。たとえ自分と全く違うルールで生きている生物（女の子にとって男兄弟というのはそういうもの。男の子にとってもまたそうだろうと思う）であつてもだ。

前述した通り、私に姉はいないのだが、家族ぐるみで親しくしていた家の、私より年上の娘さん（私にとっては姉代わりだった）のお下がりをいただいたことがあつた。その服たちは、元の持ち主の印象を強烈に持っていたので、最初は私にはそっけなく、自分の服という感じがしない。けれど、（衣服と）生活を共にし、幾つかの思い出をその服と共に作っていくようになる、と、だんだん自分のものになっていくような気がした。服には着ている当人の経験が染み込んでいく。

人間の経験知が引き継がれていくことの象徴とし

たまに本物のケンに会うんだけど、そのケンよりも、自分の心の中のケンの方が本物のような気がしていた」

といった。実在の「もの」が与えてくれる手触りや、気配は、実は私たちが想像するより「確かな」ものなのかもしれない。とすると、新品のコートを着るたび、また最初からやり直すのか、と嘆息した「コート」の姉の慨嘆は、その積み重ねてきた確かな手触りを手放し、人生を再び一からやり直さなければならなかったため息だったのかもしれない。

「コート」の妹は、自分の選ばなかった、あるいは選べなかった人生を生きた姉を、どこかクールに見てきたが、それは姉を愛さなかったということではない。姉の方もまた同じである。女の子らしく可愛らしい妹を自慢に思う気持ちもどこかにありつつ、積極的に肯定することもない。ベタベタした関係ではなかったが、それはベタベタする必要もないほど互いが互いの半身であつたからだろう。言葉で確認しあう必要すらなかった。いわば空気のように、コートが二人を結びつけていた時代が終わると、それを象徴するかのようには遠い異国に旅立つ。妹の内界に、積み上げられたコートを残して。



消費と浪費の違いは何か。消費は際限がないが、浪費は満足をもたらす、必ずストップする。浪費する「贅沢」を取り戻すためには「楽しむ訓練」が必要だ。（『精選国語総合 新訂版』）

誰かに教わるようになって



こくぶん こういちろう
國分功一郎

一九七四（昭和四九）年生まれ。哲学者。高崎経済大学准教授。主な著書に、『スピンザの方法』『暇と退屈の倫理学』『ドゥルーズの哲学原理』『来るべき民主主義』『近代政治哲学』など。

私は哲学の勉強をして、その成果を発表したり、それを学生に教えたりするのが仕事であるので、年がら年中、勉強ばかりしている。しかし、その勉強はたとえば自分が高校生の時にしていた勉強とは少し毛色が違う。というのも、人に教わったり、指導されたりすることがほとんどないからである。そうした事情もあって、私はあるときから、なぜ人に勉強を教わる必要があるのだろうかと思えるようになった。

高校生ぐらいまでは、強制力がなくても自発的に一人で勉強を続けることができる人間は決して多くないので、勉強への取り組みを促すことが教師の主たる役割の一つとなる。したがってそこでは先のような問いが問われることはほとんどない。しかしそれは勉強への取り組みをたえず促されている彼らにとってこの問いが無意味であることを少しも意味しないのであって、学ぶ側からすれば、なぜ誰かから教わる必要があるのか、自分一人で勉強しても構わないのではないのかという問いは常に問われているのである。

最近、この問いについて思うところがあった。私はこのところずっと古典ギリシア語を勉強している。これを教わるために、講義のない土曜日の午前、毎週、語学学校に通っていた。数ヶ月が過ぎたあたりで予習と復習が大変になっていき、仕事との両立が大変であったが、半年を過ぎるとかなり勘も働くようになっていった。毎週学校に通って何かを教わるというのは久しぶりの経験であり、久しぶりであるが故に、「教わる」ということについて考えを深めることができた。

誰かに教わるということについてポイントとなるのは、教わる側が、教えられている明示的な内容以上の何かを受け取っているということである。たとえば、ギリシア語の動詞の活用はギリシア語の教科書に書いてある。ならば、「それを読んで覚えればいいのではな

いか」とも思えるのだが、それは教わるという経験を具体的に想像していないが故の感想に過ぎない。

なぜなのかを頑張って説明してみよう。A、B、C、D、Eという五項目からなる教科があるとすると。生徒は当然、Aから順にEまでの項目を教わる。したがって、AからEまでを教えてもらえるなら、誰に、あるいは何に、どうやって教わってもいい気がする。単に教科書を読むだけでもいいかもしれないし、毎回違う人に教わってもいい気がする。

ところが、実際には、一人の教師から教わっている、単にAからEまでを頭に入れるのとは異なったことが起こる。というのも、教える側には、その教科に対する態度や精神、やや大袈裟に言えば、思想のようなものがあるからだ。五項目のうち、AとCとEに力点を置いて教科を把握する教師もいるだろうし、AとDに力点を置く教師もいるだろう。教師ごとに力点が異なるのは、それぞれの教科把握の背後に何らかの思想があり、それに基づいて、「ここがポイントだ」と考えているからだ。

したがって、AからEまでの五項目を教わる際、教わる側はその五つの内容以上のことを受け取っている。AとCとEに力点を置くと全体がこう見えるとか、

AとDに力点を置けばEは自然と理解できるとか、そういう把握の仕方を教わっているのだ。おそらく、この水準こそ、誰かにものを教わるという経験において最も重要なことである。教わった複数の内容が相互にいかなる関係を有しているのか。それを十分に把握できた時、人はその内容を体得したということができからである。

教える側の教科に対する思想が高度に磨き上げられていれば、教わる側は勉強しやすいであろう。だから、それを磨き上げることが教える側の課題になるわけだが、この思想というのは教科の明示的な内容に対する理解を深めていった結果として得られる、いわば副産物のようなものであって、それ自体の磨き上げを目指すことは難しい。これはたとえば、仕事をきちんと達成しようと努力することはできても、仕事達成の結果として身につく自信そのものを得ようとして努力することはできないのと同じである。

こうして考えると、教えたり教わったりするという関係には、ある意味で神秘的なものが関わっているような気がしてくるのであり、それが日常的に行われているということが不思議に思えてくるのである。



被爆以降会っていなかった友人と32年ぶりに再会した「私」は、同じ被爆者でも、体験や悲しみはそれぞれに異なるものであると実感する。
 (『精選国語総合 新訂版』『国語総合 改訂版 現代文編』)

八十路の道をのぼりながら



はやし きょうこ
林京子

一九三〇(昭和五)年生まれ。小説家。長崎県生まれ。学徒動員先で被爆した体験を描いた『祭りの場』で芥川賞を受賞。主な作品に、『祭りの場』『上海』『三界の家』など。

昨年の夏「Nagasaki」(訳・スリアーノ・マヌエラ)と題して、『祭りの場』『空罐』『グランドゼロに立って』など、私の被爆体験記がイタリアで出版された。私は、一九四五年八月九日、学徒動員中に長崎の兵器工場で被爆している。原爆炸裂の一時二分から、世界最初の原爆実験の地、アメリカ合衆国グランドゼロに立ったその日までの作品である。

出版後、イタリアの報道機関から訳者を介して一四の質問を受けた。なかの二つの質問。

その一、被爆という体験にもかかわらず八五歳という年齢を迎えることが出来たということについて、どのように思いますか。

その二、一九四五年八月九日以降の人生において、どのくらい自責・後ろめたさの念に駆られましたか。

二つの質問は被爆国である日本の読者にも共通する。同じような問いを受けるたびに、今度のばくだ

んは生きて帰ってきなくてもみんな死になつとげなと、新兵器の存在を知らされていない町に広がった噂を、思い出す。噂のように、無傷で帰った人も謎を残して死んでいった。

被爆から七〇年。よく生きてきた、と私も思う。が、問題はその中身にある。被爆直後、広島で被災者の救援にあたり、いまでも被爆者たちを看続けている医師、肥田舜太郎氏に、ジェイ・M・グールド『The Enemy Within(内部の敵)』の訳書がある。『内部の敵』とは、六日、九日に(福島原発事故も同様)被爆者たちが吸い込んだ核物質のことである。吸い込まれた核物質は臓器に付着して放射線を放射し続け、その性能が終るまで続く。発病するか運良く生き延びるか。『内部の敵』との闘いの年月なのである。

被爆した多くのクラスメートたちが、三〇、四〇代の子育ての最中に、入退院を繰り返しながら死んでい

った。核の性能は永い。「原爆症」の申請をしても六日、九日との因果関係は不明、と却下される。逝った者残った者、それぞれに重い。

その二。私の答え。自責、後ろめたさの念はありません。

兵器工場は爆心地から一・四キロメートルの地点にあった。爆心に近いせいか、閃光、熱風、爆発音、全て私は感知していない。耳にあるのは爆音。原爆搭載機B29の急降下音か、投下後、急上昇して逃げさる機の轟音か。そのみ。次の瞬間私は紙くず再成場の木造小舎の下敷きになり、机の下にいた。意識した行動なのか飛ばされたのか、これも不明。次の瞬間と書いたが、その一瞬に瞬間という記憶可能な「時」が私の人生の中に在ったのか。暇にあるのは黒光りする闇を銀色のひびが走っていく、映像である。

工場の裏は丘陵地に続く原っぱだった。原っぱは褐色に焦げた焼野に変わっていた。工員さんたちだろう。背中や腕から血を流した人たちが両腕を広げて逃げていく。飛ぶ鳥のように広げた二本の腕には、うす桃色にはがれた皮が垂れて、その人たちについて私も丘陵地へ逃げる。丘陵地を背にした盆地が、爆心地の松山町である。斜面は藁ぶき屋根の農地が点在する、田園地帯。

朝あつたはずの農家も、つるを伸ばしたきゅうりや南瓜も消えて、赤土の大地になっていた。全身焼けただれた全裸の被災者たちが、陽照りの赤土の上に転がっている。体には衣服の切れ端も残っていない。なぜ、この人たちは服を着ていないのだろう。なぜ家の中ではなく土の上なのだろう。なぜ、なぜと問いながら、私は逃げた。目鼻の区別もつかない人が、くすりばい、と私にいった。身一つで逃げる私は、誰かに頼んであげます、といった。その人は、誰でんそういいなるーといった。

一四歳の少女だった私は逃げながら、生きている自分が嬉しかった。本当に嬉しかった。

命一つを神様ありがとうございます、と子供の頃のように「天の神さま」に私はつぶやいた。あの時、私は生まれてはじめて「自分の命」を意識し、自覚し、受け止めたのである。原爆作家と言われるながら書き続けるのは、核と命の問題だからである。八五歳の私の背後には被爆死した五二人のクラスメート、生徒に同行した三人の先生の死、生を希みながら逝ったおびたらしい人びとの死がある。死の中から得た生。命ある限り生き続けなければならないのである。

これは私が自分にかした責務なのです。

(注)『低線量内部被曝の脅威』。原題『The Enemy Within』(ジェイ・M・グールド)。

〈座談会〉これからの国語教育と

大修館「国語総合」改訂のねらい

入試改革はどうなるのか？ 次の学習指導要領の方向性は？ アクティブ・ラーニングは定着するのか？
大きな時代のうねりの中で、大修館の「国語総合」改訂版3点が刊行された。
それぞれの改訂のねらいについて、編集委員の先生方に語り合っていた。

鳴島 甫 高草真知子 塚田勝郎 西一夫 山下直

(司会) 編集部

次期指導要領の方向性を見据えて

中央教育審議会の国語ワーキンググループから次期学習指導要領のたたき台が示されました。共通必修科目を「現代の国語」と「言語文化」の2科目にする案です。これについて、ワーキンググループのメンバーである西先生、お願いします。

西 ◆ このたたき台の前に、「論点整理」の段階で、高等学校の科目編成に関しては抜本的に見直すということになっていました。それを受けてこの二科目設定案が出てきたわけです。「言語文化」という名称は、誤解を招くかも

しれないのですが、「読むこと」だけではなく、「話すこと・聞くこと」「書くこと」も含みこんだ内容となるでしょう。

鳴島 ◆ 現行の指導事項が「現代の国語」と「言語文化」に分かれるわけではなく、どちらも、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の力をつけるという点では変わらない。ただ、扱う材料が「現代の国語」と「言語文化」に分かれる、と。

高草 ◆ 「言語文化」は、古典を読むのかと思ったのですが、「古典や近代以降の文章」とありますね。

西 ◆ 古典と現代文とを区別するのではなく、総合的に「日本語」ととらえて、その中で育まれてきた価値観や思想などを学習する科目として設定されるということだと思います。

鳴島 ◆ 古典嫌いの高校生が七割以上だといわれる状況の中で、従来の指導法を変えるべきだということは、以前から指摘されてきました。大修館の教科書では、すでに現行本から「近代以降の文章」を積極的に位置づけて、古典と現代とのつながりを意識させる内容を提示してきましたし、それは、今

回の改訂版でも十分配慮した点です。

塚田 ◆ 「古典や近代以降の文章を読むことを通して」という点は、非常に意味があります。現場では、近代以降の文章が古典の間に置かれていることに、とまどいがあるようです。「どう教えたらいかわからない」と。教えるのではなく、与えればいいんです。全部解説する必要はないのです。

山下 ◆ 「言語文化」といっても、決して知識・教養だけではない。その先に、学習者の思考力や認識を深めるというねらいもある。「現代の国語」と「言語文化」の両方を合わせて、総合的な日本語力をつけていく、というところがポイントなんではないか。

——「現代の国語」のほうは、どのようなイメージの科目なのでしょう。

高草 ◆ 「現代の国語」というと、かつ

ての「現国」を連想してしまいがち、性格はだいぶ違うんですね。

西 ◆ いわば「生きていくために必要な国語の力」をきちんとつける、ということだと思います。

鳴島 ◆ 端的に言うと、実社会、実生活に生きてはたらく国語能力を高める科目でしょう。会社でも、調べたことを報告する場面は多いでしょうが、それができない人が多い。大学でもレポートが書けないし、卒業論文も全然書けない。引用も適切にできない。そのような、報告をする力や考えを述べる力の不足が、問題になっている。だから、そういう力をつけましょう、と。

西 ◆ 現行の指導要領でうたわれている言語活動が、さらに前面に出るのではないのでしょうか。今よりも、もっと教材に即して言語活動を打ち出していく。単に文章を読解するのではなく、グラフなど統計資料の活用のかたを考へながら読むなど、目的意識を明確にして読むことが重視されるのでは。

山下 ◆ 「教材に即した言語活動」というところもポイントですね。現行の指

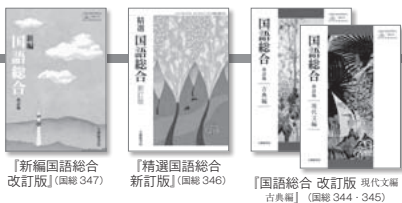
導要領の下ではありませんが、今回の大修館の「国語総合」の改訂では、教材に即した言語活動をかなり積極的に採り入れました。そういう面では、次期指導要領の内容を一步先取りしていると言えるかもしれません。

大修館3点の「国語総合」の対象

——では、今回の大修館の「国語総合」改訂版3点の内容に、お話を進めていきたいと思ひます。

鳴島 ◆ 大修館では、3点の「国語総合」改訂版をご用意しました。教科書採択にあたって先生方は、自分が教えている生徒の実態に合っているかを最も意識されるでしょう。高校卒業後、すぐ実社会に出る生徒も対象にしているのが「新編国語総合 改訂版」(以下『新編』)です。「精選国語総合 新訂版」(以下『精選』)は、大学進学等、次の段階で本格的な学習をしようとする生徒を対象にしています。

山下 ◆ そうですね。また、「国語総合 改訂版 現代文編 古典編」(以下『分冊』)は、現代文編と古典編の分冊形式ですが、





【特集】次世代につなぐ「国語総合」

〈座談会〉これからの国語教育と大修館「国語総合」改訂のねらい



高草真知子
(たかくさ まちこ)
麗澤大学・麗澤中学高等
学校講師。

置づけました。「まずは形から」(池谷裕二)は顔の表情や姿勢が心に及ぼす影響を述べた評論ですし、「贅沢を取り戻す」(國分功一郎)は浪費と消費の違いという、身近な話題から現代社会を論じたものです。「方言コスプレ」現象(田中ゆかり)は若者言葉をテーマにしています。そんなふうに身近な生活と関わらせながら論理的な文章を学習し、最終単元の「技術としての『教養』」(鷺田清一)と「白」(原研哉)で抽象思考を学習する。多様な学習者に対応できる教科書だと思っています。

高草◆「精選」には、役に立つコラムがたくさん入りましたね。文学単元には「表現を味わう」というコラムが4本入りました。例えば、「レトリックの効果」。これは、「羅生門」や「鏡」の表現をふまえて、比喩、擬音語、擬態

を身につけるというところが鮮明に出てくる教科書だと思います。相当な教材数ですが、分冊形式なので、コンパクトで持ち運びやすいのも魅力です。

圧倒的な教材数、評論重視を徹底！

『国語総合 改訂版 現代文編』(国総344)

鳴島◆「分冊」の現代文編では、評論をともかく数多く収録しました。単元ごとにコラム「評論の視点」を付けたことも新しい工夫です。評論を読む力を身につけるということが鮮明に出てくる教科書だと思います。相当な教材数ですが、分冊形式なので、コンパクトで持ち運びやすいのも魅力です。

語を取り上げています。「文体をとらえる」も、普段見逃しがちな内容を指摘し、授業中に確認したり生徒に自学させたりすることもできる。そして、各単元に「広がる読書、広がる世界」という読書コラムが付いています。これは、評論を読む上で大切なキーワードを解説しつつ、今話題になっている本の紹介が載っていて、大いに活用できますね。

山下◆文学作品では、新教材「友よ」(林京子)に注目してほしい。引き込まれる作品ですし、平和教育としての意義も深い。すばらしい作品です。

塚田◆読み応えのある、しっかりと教材が並んでいますね。

高草◆大修館の評論教材は、論理性をしっかりと吟味して、序論・本論・結論という流れがきちんと整っています。グローバル化、情報化社会、敬語など、今読んでほしいテーマの評論が数多くそろっています。

西◆単元ごとのテーマを明確に示し、それをコラム「評論の視点」でうまくくくっている。一単元に二教材並んでいます。一単元でテーマの背景をまとめることができるので、単元設定の意図が伝わりやすい。文学編にもコラム「文学の視点」が設けられていて、学ばせやすい構成になっていますね。

高草◆新教材「おまえはやって来た」(田中真知)は、ぜひ高校生に読ませたい作品です。アフリカの状況を取り上げ、今の日本の高校生には想像できないような過酷な環境下で暮らしている人々の実体験がさらりと書いてある。別世界が見える随想です。

この形式を採用する学校は、いわゆる進学校が多いようです。『精選』の対象は、もちろん進学校も含みますが、大学だけではなく、短大や専門学校に進む生徒など、非常に多岐にわたった学習者が想定されています。

——新時代に対応するべく全面改訂！
『精選国語総合 新訂版』(国総346)

鳴島◆「精選」は、3点の「国語総合」の中で、最も大きな改訂を施しました。まず、目立つのが、言語活動の、いわゆる充実を図ったことです。

山下◆現代文編では、全11単元中5単元に「言語活動」という場を設けました。すべての言語活動が単元内の文章教材と関連づけて作ってあります。例えば、冒頭単元の「対話から始めよう」。高校に入学し、知らない生徒同士が出会う中で、「尋ねあい」(西研)を学習した後でクラスメートと対話をする活動につながる。もしくは、「対話から始めよう」に取り組むという目的をもって「尋ねあい」を読むという展開も考えられる。実際の授業展開の中で

どのように使えるかを意識し、丁寧に文章教材と関連させて言語活動教材を作った点が、特長だと思います。

鳴島◆これからの高校教育において、協働的な学習、いわゆるアクティブ・ラーニングに重点が置かれることが、編集段階でわかっていたので、それに対応できる教材を用意したわけです。

山下◆現代文編末の「豊かな言語活動のために」にも注目していただきたいですね。書く力をつけるために、「ことばから文へ」「段落から文章へ」と、



『精選国語総合 新訂版』(国総346)
「言語活動 対話から始めよう」



山下直
(やました なおし)
文教大学准教授。
2000～2014年文部
科学省教科書調査官。

「書くこと」の出発点から丁寧に課題をこなすことで、表現力が身につくようにしました。また、「統計資料を活用する」にもひと工夫あります。複数の統計資料を読み取って活用する教材ですね。評論単元の「動的平衡としての生物多様性」(福岡伸一)や「空気を読む」(香山リカ)にも、本文の内容と関連のある統計資料を載せています。これは、評論を学習しながら、統計資料を活用して発展的な学習をしてもらいたいという仕掛けなんです。

鳴島◆次期指導要領の「現代の国語」にもつながるような仕掛けですね。

山下◆また、教材のラインナップが非常に充実しています。例えば、評論単元が五つありますが、(一)～(四)は、生活に身近で、具体的な場面を想像しながら論理を追いやすい教材を位



【特集】次世代につなぐ「国語総合」

〈座談会〉これからの国語教育と大修館「国語総合」改訂のねらい

実社会で生きる力を！

『新編国語総合 改訂版』（国総347）

鳴島 ◆ 高校を卒業して社会人になる生徒たちは、社会に対する意識が強い。『新編』はそのような生徒が対象ですから、言葉の力をつけていく上でも、対社会を意識して作っています。

山下 ◆ そのことが、教材の並びにも明確に出ていると思います。「何のために『働く』のか」（姜尚中）や、「政治の本質」（橋爪大三郎）が象徴的ですね。

高草 ◆ 『新編』の新教材のおすすりは、「人生は『動詞』で変わる」（齋藤孝）です。自分のお気に入りの動詞をもち、自分を変えよう、というユニークな視点の文章です。大学で授業してみたら、学生の食いつきがすごくよくて、「マイ動詞」を紹介する活動は自己紹介にもなり、自分の生活を見直すきっかけにもなります。

西 ◆ 学級作りや人間関係を作っていくときにも使える、いい教材ですね。鳴島 ◆ また、『新編』の特徴として、基本を大切にしている点もあります。やはり、漢字が苦手な学習者が多いと

教材ではありませんが、同じく『分冊』にある『和歌』という言葉の意味」（大岡信）は、自分たちの普段の言語活動の根源が、古典から綿々と息づいていることに気づかせる読み物として、活用してほしいと思っています。

鳴島 ◆ 今おっしゃったような教材が、次期指導要領の「言語文化」につながっていくでしょうね。

西 ◆ 『新編』では、古典に親しみをもたせる工夫をしました。例えば、「春はあけぼの」の下段に訳者の違う「春はあけぼの」の訳をいろいろ載せました。

田島伸夫さんの現代詩訳、英訳、漫画による表現等々。逐語訳で、文法的な正しさだけにこだわらず、古典のおもしろさが伝わらない。そこを少し変えてほしいと思います。「百人一首」に大岡信による詩的な現代語訳を載せているのも、同様の工夫です。

生徒の実態に合わせた漢文の教材化

塚田 ◆ 漢文については、3点の「国語総合」の特徴が鮮明なのが導入単元です。『新編』では、冒頭に「漢文のす

いう実態も無視できないですから。

高草 ◆ 教材ごとに「漢字レベルアップ」を付け、本文中の語とは別の熟語や読みの問題を出して、語彙が増えるようにしています。「学習のポイント」にも、慣用句を使った短文作りや言葉の知識が広がる問題を多く付けました。

古典をより身近に！古文編の工夫

次に、古典の扱いに移りたいと思います。古文について、西先生、お願いします。

西 ◆ 『精選』では今回、大まかな時代区分のスケールを作品冒頭ページの右端に入れました。文学史を本格的に授業で扱うのは時間がかかりますから、せめて、どのあたりの作品かを視覚的に把握してもらおうと考えました。

高草 ◆ すごく小ワザが効いています。

西 ◆ 注にも工夫をしました。何のための注なのか、一目でわかるように、人名には^①、地名には^②、補足には^③と付けました。注には、訳注と事柄注の二種類がありますが、その違いをわかりやすく示しました。

塚田 ◆ この工夫は、漢文編も同様で

すめ（加藤徹）という現代文を置きました。これは、あまり勉強に気持ちに向かない生徒に対して、漢文はこういう見方ができるんだよ、と示すことをねらいとしています。一方、『精選』分冊の導入単元には、「なぜ漢文を学ぶのか」「日本人は漢文から何を学び取ってきたのか」について、正面から迫る文章を載せました。

高草 ◆ 「国語総合」3点とも、「人面桃花」が入っていますが、掲載のしかたが違いますね。『精選』『分冊』は原文が長く載っていますが、『新編』では難しい箇所は現代語で解説し、ポイントになる箇所を漢文にしてある。同じ作品でも教科書によって編集を変えていることの、いい例だと思います。

塚田 ◆ 長く読むことに全く抵抗のない高校生と、そうではない高校生がい



西一夫
(にし かずお)
信州大学教授。中央教育
審議会教育課程部
会国語ワーキング
グループメンバー。

す。高校生は注の使い方が下手で、現代語訳の中に事柄の注の内容をそのまま入れてしまうこともあります。そこで、訳注は訳注だと、わかりやすくしたわけです。

西 ◆ 『精選』の和歌単元では、三代集をまとめて、「四季の移ろい」「人間と自然」「恋慕と別離」というテーマに沿って歌を並べました。和歌の修辭を体系的に学習できるようにしています。他社でもテーマ別の分類はありますが、韻文を学ぶ上での修辭性に配慮している点が、大修館『精選』の特長だといえるでしょう。

『分冊』では、第七単元に、本居宣長「玉勝間」と世阿弥「風姿花伝」を取り上げました。古典の文芸理論が現代の評論につながっている、その一つの道筋を示したいと考えました。また、新

ますから。『新編』では、漢文の表現方法に親しむことに重きを置きました。現代語訳などを利用しながらでも、長い作品が読めたという充実感、満足感が生まれると思います。

また、ぜひ注目していただきたいのが、『精選』『分冊』のコラム、「漢文の窓」です。今回、すべてのコラムを一新しました。漢文に自然と興味をもてるような書き下ろしのコラムです。「もっと読みたい！」という書籍紹介欄も設け、高校生が手に取りやすい、新しい書籍を紹介しました。

山下 ◆ 「もっと読みたい！」で取り上げた書籍は、生徒だけでなく、若い先生方にも役に立ちそうです。

— ありがとうございます。

(2016年3月2日大修館書店会議室にて)



塚田勝郎
(つかだ かつろう)
筑波大学付属高等学校教諭。



『精選国語総合 新訂版』
『国語総合 改訂版 古典編』
の「もっと読みたい！」



アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善——言語活動の一層の充実

なるしま
はじめ
鳴島 甫
筑波大学名誉教授
大修館書店教科書編集委員

■アクティブ・ラーニングの出どころ

アクティブ・ラーニングということが言い出されたのは大学教育の反省からである。大学での授業が一方的な講義に終始し、学生の方はそれを聞き、理解したところを期末試験で試されるといったやり方への反省からである。学びが全て受け身であり、主体的に学ぶという姿勢が全くと言っていいほど欠如していたのである。これでは、新しいものを生み出す主体的な姿勢は育たず、これからの社会に対応できる人材を育ててはいけないということによりややく気付いたと言ってよいだろう。そこで打ち出されたのがアクティブ・ラーニングである。これが次期学習指導要領における授業改善となつて整理され現在にいたっているところである。

■アクティブ・ラーニングとはいかなるものか

では、それがどのように整理され示されたのかを、次期学習指導要領改訂の方向を示した「教育課程企画特別部会 論点整理」（平成27年8月27日「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会」）で見てみよう。その17頁「アクティブ・ラーニングの意義」には次のように述べられている。

○思考力・判断力・表現力等は、学習の中で（2）の①iiに示したような思考・判断・表現が発揮される主体的・協働的な問題発見・解決の場面を体験することによって磨かれていく。身に着けた個別の知識や技能も、そうした学習経験の中で活用することにより定着し、既存の知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付いていき、ひいては生涯にわたり活用できるよう

な物事の深い理解や方法の熟達に至ることが期待される。

○また、こうした学びを推進するエンジンとなるのは、子供の学びに向かう力であり、これを引き出すためには、実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起する必要がある。

○このように、次期改訂が目指す育成すべき資質・能力を育むためには、学びの量とともに、質や深まりが重要であり、子供たちが「どのように学ぶか」についても光を当てる必要があるとの認識のもと、「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」について、これまでの議論等も踏まえて検討を重ねてきた。

以上のように、「アクティブ・ラーニング」は「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）」と表現され、「思考力・判断力・表現力」を磨いていくものとして位置付けられている。現行の学習指導要領においては、

「思考力・判断力・表現力」は学校教育全体にわたつての「言語活動の充実」によって図つていくとされているが、次期学習指導要領においてもその方向性は変わらず、「アクティブ・ラーニング」はその強化を図るものと捉えることができる。

■高等学校国語科に向けられた矛盾

以上のような大学教育での反省から始まった授業改善の動きは、小中学校では大学教育での反省よりかなり以前からなされてきていた。従つて、この動きの矛先が向いたのは高等学校国語科に対してであった。同じく「論点整理」の35頁には、「特に」として次のように書かれている。

○特に高等学校教育においては、教材の読み取りが指導の中心となりがちで、国語による主体的な表現等が重視されていないこと、話し合いや論述など、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受し、社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、



【特集】次世代につなぐ「国語総合」

現行の高等学校国語科における課題と対応（案）

- 課題1：**教科書教材等への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業が行われる傾向（P4）
→各科目において、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を図る
- 課題2：**話し合いや論述など「話すこと・聞くこと」「書くこと」における学習が低調（P4）
→共通必修科目及び選択科目において、話し合いや論述などの活動による「話すこと・聞くこと」「書くこと」に関わる能力の育成を図る
- 課題3：**高校生の思考力・判断力・表現力の一部に課題（P5）
→各科目において、資質・能力の三つの柱のうち、特に思考力・判断力・表現力等の育成を重視・テキスト・情報を理解する力、文章や発話により表現する力（創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面）
・考えを形成する力
- 課題4：**メディアリテラシーや課題探究に関する言語活動等があまり行われていない（P5）
→共通必修科目及び選択科目において、メディアリテラシーや課題探究に関する言語活動等による情報活用能力の育成を図る
- 課題5：**進学希望者の多い普通科では、A科目の開設率が低く、言語文化に関する学習が不十分である可能性がある（P6）
- 課題6：**古典に対する興味・関心とともに、必要性を感じさせる指導にも課題（P7）
- 課題7：**学習意欲を高めるために、「文法」「古語の意味」等に関する指導の改善の必要性（P7）
→共通必修科目及び選択科目において、言語文化を理解し、社会や自分との関わりの中で生かす学習を重視する
→選択科目において、我が国の伝統的な言語文化への理解・関心を深める
- 課題8：**小・中学生に比べて、高校生の読書活動は、ここ10年ほど改善がみられない（P8）
→各科目において、読書活動の充実を図る

高等学校国語科の現行の課題と改訂の方向性（たたき台）

※ 課題の番号は、前頁に記載のある課題番号

【現代の国語（仮称）】 実社会・実生活に生きて働く国語の能力を高める科目 ・収集した情報を解釈し、根拠に基づいて論述したり議論したりする活動を通して、思考力・判断力・表現力等を育成する学習を重視（「読むこと」と「書くこと」を基に「書くこと」や「話すこと・聞くこと」に展開する指導を重視） →特に、課題2、3に対応 ・情報活用能力の育成を重視 →特に、課題4に対応	【言語文化（仮称）】 我が国の言語文化への理解・関心を深める科目 ・古典や近代以降の文章を読むことを通して我が国の言語文化を理解し、社会や自分との関わりの中で生かす学習を重視（「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を中心とする指導） →課題3、5、6、7に対応
【論理国語（仮称）】 多様な文章等を、多角的な視点から理解し、自分の考えを論理的に形成して表現する能力を育成する科目 →特に、課題3（主として、創造的・論理的思考力の側面、考えの形成）に対応	【文学国語（仮称）】 小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情懷等を読み味わい、表現の仕方等を評価するとともに、それらを創作する能力を育成する科目 →特に、課題3（主として、感性・情緒の側面、考えの形成）に対応
【国語表現（仮称）】 自分の思いや考えをまとめて、適切かつ効果的に表現し、他者に伝える能力を育成する科目 ・表現に関わる能力や、情報活用能力の育成を重視 →特に、課題2、3（主として、他者とのコミュニケーションの側面、考えの形成）、4に対応	【古典探究（仮称）】 古典としての古文・漢文を課題意識をもって読み深めることを通して、我が国の伝統的な言語文化への理解・関心を深める科目 →特に、課題3、4、5、6、7に対応

課題1 ……各科目において、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を図る
課題8 ……各科目において、読書活動の充実を図る

「現行の高等学校国語科における課題と対応（案）」と
「高等学校国語科の現行の課題と改訂の方向性（たたき台）」

における「各科目において、読書活動の充実を図る」が今後の授業改善に大きな要素となってくることは間違いない。いずれにしろ、大修館の「国語総合」

の改訂は「次世代につなぐ『国語総合』」としてこれらの動きの方向を押さえてのものであることを明記しておきたい。

こういう要請のもと、新設された「国語ワーキンググループ」の第4回会議（平成28年2月19日）で「高

興味が高まらないことなどが指摘されているところである。

○このような、高等学校の国語教育について長年にわたり指摘されている課題の解決を図るためには、科目構成の見直しを含めた検討が必要であると考えられることから、共通必修科目については、①実社会・実生活に生きる国語の能力を育成する科目、②古典を含む我が国の言語文化に関する科目、選択科目については、①近代以降の口語体の文章（現代文）を中心に、古典としての古文・漢文を含めて扱うなど、総合的な能力を育成する科目、②多様な文章等から得た情報を基に自分の考えをまとめ、適切な構成等で表現する能力を育成する科目、③文学的な文章を読んだり書いたりする能力を育成する科目、④古典としての古文・漢文等を読むことを通して、我が国の伝統的な言語文化への理解・関心を深める科目を柱に、科目構成の在り方を検討することが求められる。

等学校国語科の科目構成について」として別表のような「現行の高等学校国語科における課題と対応（案）」及び「高等学校国語科の現行の課題と改訂の方向性（たたき台）」が提案された。科目名はいずれも「仮称」となっているように変わらうものがあるが、そこに付された説明に沿った科目になることは間違いない。特に、必修科目としてあげられた二科目は、「国語総合」を必修とする現在の高等学校国語科の科目構成と大きく異なるものである。かつて、「現代国語」という必修科目があつて、それが「国語総合」に変わった時に、「言語文化」を明治以前、以後で区切って見ることをやめようという動きがあつた。しかしそれは広がらずに、依然として「現代文」「古典」という区分けが残って今日に至っている状態である。だが、必修科目「言語文化」を見ると、そこには「古典や近代以降の文章を読むことを通して」とあり、その境目を取り払っていることが分かる。この変更は、科目の配当時間の問題もからんで高等学校国語科の現状を大きく変える可能性があることを指摘しておきたい。また、課題1における「各科目において、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を図る」と課題8に



国語で鍛える論理的思考力

しまだ やすき
島田康行
筑波大学人文社会科学教授
大修館書店教科書編集委員

1 教育課程の改訂に向けて

論理的に思考し、表現することの指導は、今後、国語の指導内容の一つとしてますます重みを増していくでしょう。

昨夏に公表された「教育課程企画特別部会 論点整理」の内容に驚かれた方も多いのではないのでしょうか。高校「国語」について、

教材の読み取りが指導の中心になりがちで、国語による主体的な表現等が重視されていないこと、話合いや論述など、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が十分に行われていないこと

が改めて指摘され、次期教育課程における高校「国語」の共通必修科目が、①実社会・実生活に生きる国語の能力を育成する科目と、②古典を含む我が

国の言語文化に関する科目に分けられています。

①は、社会生活の中で有効に機能する「話すこと・聞くこと」や「書くこと」を主たる指導内容とする科目として構想されていると思われます。単に、現行「国語総合」から古典を引いたような内容をイメージすることは当を得ていないでしょう。また、選択科目には「多様な文章等から得た情報を基に自分の考えをまとめ、適切な構成等で表現する能力を育成する科目」が構想されています。

これらの科目を通して、各種テキストを批判的に読み、論理的に思考して自分の考えをまとめ、的確・適切に表現する力を育成することが、いっそう求められるようになることはほぼ確実だと思われます。

2 高大接続の改革に向けて

また、高大接続の場面においても同様に論理的思

考力を重視する方向が示されています。高大接続システム改革会議は、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」において求められる諸能力の育成のために「国語」で重視すべきプロセスを、次のようにまとめています。

例えば、多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等から得られる情報を整理し、概要や要点等を把握するとともに、他の知識も統合して比較したり推論したりしながら自分の考えをまとめ、他の考えとの共通点や相違点等を示しながら、伝える相手や状況に応じて適切な語彙、表現、構成、文法等を用いて効果的に伝えること。

「文章や図表等から得られる情報」をもとに、「比較したり推論したりしながら自分の考えをまとめ」「効果的に伝えること」を重視するような出題が求められていることがわかります。

昨年一二月に公表された同会議の資料には、思考力・判断力・表現力を評価する方法のイメージとして条件付記述式問題などが取り上げられており、「結論を導き出す思考のプロセスを説明すること」など

が条件の例として言及されています。論理的に思考し、そのプロセスを表現することが、まさに問われることになるのです。

このような論理的思考力の重視は、実は近年の教育改革の流れの中に、すでにしばしば顔を覗かせていました。たとえば、平成二十四年の「特定の課題に関する調査」（国立国語教育政策研究所）のテーマは、教科の枠を超えた「論理的思考」でした。また同年の「大学改革実行プラン」（文部科学省）では、高校・大学の教育と連動した入試改革、センター試験の改革と並んで「クリティカルシンキングを重視した入試への転換」が提言されていました。その流れが昨年末に公表された「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の問題イメージ例にまで繋がっているわけです。（本誌42頁参照）

3 大修館「精選国語総合 新訂版」で学ぶ論理的思考

『精選国語総合 新訂版』は、高校生の論理的思考力を伸ばすための新しい工夫を取り入れています。

■豊かな言語活動のために

その一つが、「現代文編」末尾の「豊かな言語活動のために」です。ここには、「ことばから文へ」「段



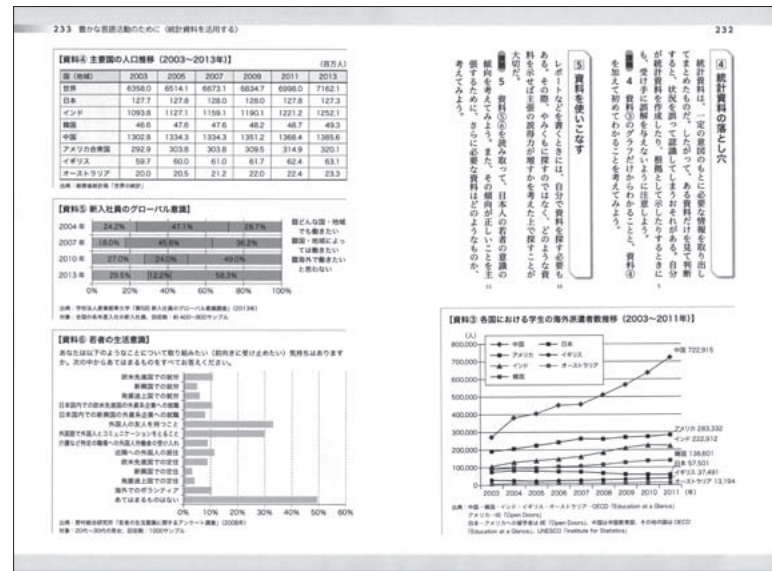
【特集】次世代につなぐ「国語総合」

よう。

たとえば抽象化。論証する文章の中では、一つ一つの文の抽象度を上げたり下げたりして段落を構成することが必要になります。たとえば帰納・演繹。論証の二つのかたちを理解することは、理由から主張を導く方法をきちんと身に付けることに直結するはず。

分節化は聞きなれない言葉かもしれませんが、人間が外の世界をどのように認識するのか、そのために言語がどのように働いているのかを知るうえで重要な概念です。論証の過程における定義の重要性などに気づいていくためのきっかけともなるでしょう。

そして根拠を吟味すること。文章の論理を読み解くということは、そこに示された根拠と主張、その両者を結び論拠の妥当性を確かめる作業にほかなりません。しかし、これまでの国語の学習の中で、そのことはそれほど意識されてきたでしょうか。こう書くといぶん難しそうなお印象も与えそうですが、このコラムの練習課題を見てください。



『精選国語総合 新訂版』「統計資料を活用する」(豊かな言語活動のために)

次の例文に対する論理的な反論を書いてみよう。

① 朝顔に毎日をやってたら元気に育った。コスモスにも毎日をやるべきだ。

② 田中君、山下君、竹宮君は、高校生なのに一か月に一冊も本を読まない。高校生はみな本を読まないのだ。

③ 今どきの高校生はみな携帯電話を持っている。大山さんは高校生だから、携帯電話を持っているはずだ。

(『精選国語総合 新訂版』211頁)

身近な題材が用いられ、高校生にも無理なく取り組めるようになっています。こうした学習を通して身につく考え方は、豊かで質の高い社会生活を送るために必須であることも明白でしょう。

また、これらのコラムを、単元の教材と関連付けて配置したことも、学習を円滑に進めるための工夫です。ぜひ積極的に活用して、教室に新しい風を吹き込んでいただきたいと思います。

落から文章へ」という、語彙レベルから文を組み立て、段落を構成し……というステップを丁寧に取り上げた教材が位置づけられています。また、「統計資料を活用しよう」は、まさに先述した「文章や図表等から得られる情報」を「比較したり推論したりしながら自分の考えをまとめ」る教材になっています。「大学入学者希望者学力評価テスト(仮称)」の問題イメージ例との類似を感じる方もいることでしょう。新しい国語力のあり方、新しい入試のスタイルを先取りした内容だと言えるかもしれません。

■ 思考を深める

コラム「思考を深める」も、論理的思考力を高めるための工夫の一つです。その内容は次の通りです。

- ・ 説得の方法——対比・具体例・抽象化
- ・ 主張を支える——類推・帰納・演繹
- ・ 言語と認識——認識・分類・分節化
- ・ 読解から批評へ——根拠の吟味

サブタイトルを見ただけでも、論理的な思考に欠かせない内容が押さえられていることがわかるでしょう。

読む力の育成から豊かな読書生活へ

おくむらじゅんこ
奥村準子

筑波大学附属高等学校教諭
大修館書店教科書編集委員

平成26年12月の中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」により、大学入試のあり方に関する大きな改革が明らかとなりました。この動きに伴い、高等学校の教育現場でも「アクティブ・ラーニング」に代表される主体的・協働的な問題発見・解決学習の手法の導入が話題となつていきます。このような時代の変化に対応して生まれ変わる「国語総合」の教科書は、生徒の主体的な学びを支援するページが増えて様々な工夫が盛り込まれました。

1 「広がる読書、広がる世界」(「精選国語総合 新訂版」)
『精選国語総合 新訂版』では、「広がる読書、広がる世界」というコラムが新たに設けられました。九つのテーマは「他者と自分」から始まり、「文化・

文明」、「科学と未来」、「社会と情報」、「戦争と国際社会」など、複雑に多様化する現代社会を様々な視点から見つめた解説と、参考文献を二ページにわたって紹介しています。この読書コラムの魅力は、「読む力を高めるためのキーワード」が随所に登場し、現代文編末尾の「キーワード解説」を参照する形に仕立ててある点にあります。

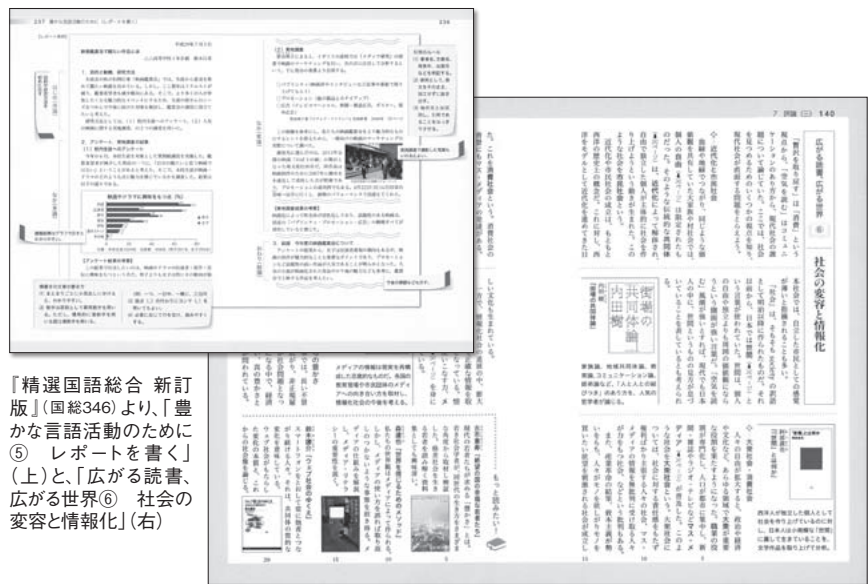
たとえば「④科学と人間の未来」(96頁)を読むと、「再現可能性」「機械論」「生命倫理」などのキーワードが登場します。それらを図解付きで解説するページを参照しながら理解を深める形になっていきます。授業で詳しく扱う時間がない場合でも、コラムページの紹介によって、生徒の主体的な学びを促すことになるでしょう。

同じページに、これらのキーワードをさらに深く学ぶための参考文献がカラーの表紙イメージ付きで掲載されています。これは、コラムの内容に興味をもった生徒が「新たな一冊に出会う場」となっています。紹介される書籍は、古典的な名著をはじめ、新しい知見を伝える新書、手軽に読めるエッセイや生徒が親しみやすい漫画作品まで、バラエティに富む内容になっています。

学校読書調査(全国学校図書館協議会、毎日新聞社)によれば、「一ヶ月に一冊も本を読まない」高校生の割合は、この十年間およそ五割で推移しています。部活動や受験勉強などで多忙な高校生にとって、興味をそそる読書コラムが教科書にあることが、本を手取る契機となってくれればと思います。

また、コラムの効果的な活用方法として、一つの教材を読む際、読書コラムと言語活動の教材と一緒に活用するのも面白いと思います。たとえば、「広がる読書、広がる世界」⑥「社会の変容と情報化」(140頁)は、単元「評論(三) 現代を問う」に付随していますが、ここに新教材の「贅沢を取り戻す」(國分功一郎)が掲載されました。「浪費と贅沢」という罪悪感を抱きそうな行為が、じつは「楽しむ」ための訓練を経て「消費」という悪循環の行為から逃れる手段となり得ることを、哲学者である筆者が鮮

【特集】次世代につなぐ「国語総合」



『精選国語総合 新訂版』(国総346)より、「豊かな言語活動のために⑤ レポートを書く」(上)と、「広がる読書、広がる世界⑥ 社会の変容と情報化」(右)



やかに論じています。

日常の行為に意外な視点を与える教材を読んで刺激を受けた後で、「社会の変容と情報化」について理解を深め、「豊かな言語活動のために⑤ レポートを書く」(234頁)に取り組んではどうでしょうか。ここでは、読書コラムで紹介された『メディア・リテラシー』(菅谷明子)が、レポートの引用文献として再載されています。読書コラムの書籍を言語活動に活かす形を示すことで、より主体的な生徒の学びを引き出すことができると思います。

2 「読書の窓」(「新編国語総合 改訂版」)

『新編国語総合 改訂版』にも「読書の窓」というコラムを新設し、生徒へ「本との出会いの場」を提供しています。学校図書館と連携し、教科書で紹介されている書籍を積極的に配架・紹介してもらうことで、「本との出会いの場」を広げる手立てとなります。授業から読書への「次の一歩」を踏み出す仕掛けを用意することが、生徒を豊かな読書生活へ導くことになるでしょう。

メージしづらいこの語を、「心身二元論」と「主体と客体」を用いて丁寧に説明しています。さらに、カラーで見やすい付録「キーワード解説」(307頁)を参照することで、より理解が深まる形になっています。内田・原両氏の文章は近年の大学入試問題で頻出しており、これらにチャレンジすることで、大学入試レベルの問題を解く足がかりとなるでしょう。

4 「伝える力」は「読む力」から

平成36年度から導入される次期学習指導要領と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」において評価される「大学教育を受けるために必要な能力」として、高大接続システム会議は「中間まとめ(別添資料5)」で次のように述べています。

多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等を読み、そこから得た情報を整理して概要や要点等を把握するとともに、情報を統合するなどして自分の考えをまとめ、他の考え方の共通点や相違点等を示しながら、伝える相手や状況に応じて適切な語彙、表現、構成、文法を用いて効果的に伝えること



『国語総合 改訂版 現代文編』より、
「評論の視点⑥ クロージングアップされる身体」

3 「評論の視点」(「国語総合 改訂版 現代文編」)

『国語総合 改訂版 現代文編』では「評論の視点」というコラムを新たに作りしました。高校に入学したばかりの生徒にとって、論理的な文章展開や抽象的なキーワードの多い文章は、読解に苦しみだり「読み方が分からない」と感じたりすることもあるようです。そこで、単元の教材に合わせたコラムを掲載して、読解の支援となるように構成しています。たとえば、「九 身体と思考」の単元では、「白」(原研哉)に加え、「意味と身体」(内田樹)が新たに掲載されました。両氏の評論文で取り上げられた「身体(性)」について、「評論の視点⑨ クロージングアップされる『身体』」(154頁)で詳述しています。生徒がイ

つまり、「自分の考えを効果的に伝える」能力をはかるテストが検討されている、ということなのです。これはグローバル化・多様化の進む現代社会で求められる能力とも言えるでしょう。このような能力を伸ばすために必要な学びとはどのようなものなのでしょうか。前述の教材「意味と身体」で、内田氏は次のように述べています。

言葉だけがあって、身体的実感が伴わない。その逆に、身体的実感はあるが、言葉にならない。この絶えざる不均衡状態から言葉は生まれてくる。むしろ、そこからしか言葉は生まれてこない。だから、創造的な言語活動とは、この「絶えざる不均衡」を高いレベルに維持することではないか、僕はそんなふうに思うのです。

「国語総合」の教科書では、このような魅力ある教材との出会いと、様々な身体的実感との往還によって、内田氏の述べる「創造的な言語活動」が成立するのではないのでしょうか。そして生徒は、新たな言葉と意味を獲得していくことができるのです。

古典への扉を開く

たけしまちはる
竹島千春
東京都立町田高等学校教諭
大修館書店教科書編集委員

職場で『源氏物語』が話題になり、好きな登場人物は誰かという話で盛り上がった。臘月夜尚侍や六条御息所の名が挙がって面白かったが、それ以上に同僚が文理・男女を問わず、『源氏物語』に親しんでいることに驚いた。四、五十の世代に古典は生きづいてゐるらしい。翻って現在私が受け持つ生徒は、これほど古典に親しみ、将来このような会話をしてくれるだろうか。

生徒の古典離れに接する機会が増え、心許なく思っている。「何で古典を学ばなければならないのか。何の役に立つのか。」スピーディで実学重視の現代に、古典なんて時代遅れで不要だと言わんばかり。国語の教員として何とも残念でならない。反論したいことは山ほどあるが、授業や教科書づくりにおいて何らかの変化を迫られているのかもしれない。

1 学習指導要領

学習指導要領の次回改訂で、高校の国語必修科目を「現代の国語」「言語文化」の二科目とする案が今年二月に公表された。前者は「読むこと」に偏らず、話し合いや論述といった表現能力を育む内容に、後者は、従来のような古典の学習だけでなく、それらが今の日本語にどうつながっているか等も学ぶということである。選択科目も再編の予定で「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探求」(仮称)が検討されているという。

詳細は最終答申を待たなければならないが、古典に親しみをもち、古典を自分たちにもつながりのある言語文化としてとらえさせるといふ方向性がより鮮明になりそうだ。現行版でも、「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成

白さということになるだろうか。

3 大修館『精選国語総合 新訂版』の様々な工夫

本書は、教材として必要なものを押さえながら、わかりやすさ、面白さに重点を置き、使い勝手やデザイン等に様々な工夫をして「次世代につながる」教科書を目指したものである。その主なものを紹介してみたい。

(1) 教材の工夫

教材は「我が国において継承されてきた言語文化に親しむことができるよう」、生徒の興味をひく面白いもの、高校の早い段階で読ませたい著名で定番のもの、伝統的なものの見方、感じ方、考え方を伝えるもの、すなわち「長く読まれている古典」を厳選して収録した。

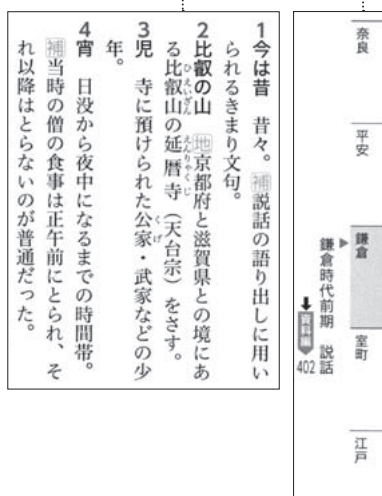
冒頭教材には、古文編・漢文編とも「古典に関する近代以降の文章」を置き、導入時の生徒への動機付けとなるようにした。古文編の冒頭「古典の魅力」は、テレビ等でも幅広く活躍する野村萬斎氏の文章である。「無理せず目や耳で古典を楽しもう」「古典はあなたを映し出す鏡」「古いもの、新しいものを上手に取り込みつつ、前を否定せずに残してきた



2 日本ブームと若い世代
ところで、最近「和のブーム」「美しい日本」等と、日本の伝統や文化を取り上げ称える報道や出版が目につく。東日本大震災の復興や東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、国民の意識を高めようという動きの一つなのかも知れない。学校現場でも「伝統・文化に関する教育」として特別予算がつき、関連物品を購入したという話を耳にする。
一方で、伝統的な言語文化である古典が、若い世代に流行っているとは言い難いだろう。前述した生徒の古典離れは、文学部志望者の減少とも関連する。ただし、かつて「あさきゆめみし」や「三国志」、「陰陽師」等、漫画やゲーム、映画等をきっかけとして、原典に関心が集まることなかった訳ではない。とすると、古典を次世代につながるキーワードは、若者のツールや使い勝手、若者目線のわかりやすさ、面



【特集】次世代につなぐ「国語総合」



『精選国語総合 新訂版』(国総346)より
年代スケールと脚注欄

けとなるようなコラムを六本設けている。

(5) 資料編

古典文学史年表は使い勝手を考え、古文と漢文が対照できるようにした。また、図録はより見やすくわかりやすくなるように内容・構成・デザインを一新している。さらに、頻繁に開く助動詞活用表を後見返しに置く等、使い勝手のよい構成を追求した。

以上、紹介がまとまりなくなってしまうが、何といっても先生方に、手にとってご覧いただくことが一番だ。生徒や先生方にとって、わかりやすく、

面白く、使い勝手がよいものになっているだろうか。ご意見・ご要望等をお聞かせいただき、よりよいものを今後も目指していきたい。

古典は若い世代に馴染みが薄く、またその魅力も年功を経て理解されるものなのかもしれない。だから、次世代を担う生徒たちに、古典への扉を開くことができたらよい。扉の先の広がりを知り、生徒自身が歩みを進めるようになったら素晴らしいと思う。本書を活用し、古典好きの生徒を増やしていただきたいと願っている。

のが日本の古典芸能の特長」等、古典の本格的な学習を始める生徒の心に刻みたい言葉に溢れている。

また、次の導入教材「ねずみの婿とり」では、レイアウトを絵本風にするとともに、この教材での学習内容やねらいをタイトルの下に示し、教材の位置づけを明確にした。さらに、取り扱いが単調になりがちな和歌単元は、通常の歌集別ではなく三つのテーマ別とし、各テーマごとに歌風・リズム・修辭の面から三大和歌集の特徴を捉えられるように工夫している。

漢文編では、入門教材において「解説」と「まとめ（漢文を読むために）」を見開き単位で構成し、生徒や教員の使いやすさに配慮した。また、思想単元には適宜「近代以降の文章」や図解を交え、生徒の理解を促している。

(2) 教材化の工夫

現代語訳の際、教科書脚注の事柄の説明をそのまま文中に落とし込んだ珍訳・迷訳に遭われた方はいないだろうか。本書では脚注に「**国語**」等のマークを設け、「**訳**」と事柄の説明（人名・地名・他）とを明確に区別できるようにした。また、古文編では、各作品の冒頭に年代スケールを置き、生徒が作品の

成立時期やジャンルを視覚的に把握できるようにした。文学史上の把握に役立つだろう。（次ページ参照）

(3) 言語活動

言語活動の充実にも力を入れ、古文編「古典の広がりを知ろう」では、『今昔物語集』の魅力語る芥川龍之介の文章を取り上げた。説話の面白さと広がりを知り、彼が取材した説話を選んで読む活動を設定している。また、漢文編「漢語の知識を広げよう」では、「勉強」という語の意味や由来を述べた一海知義氏の文章を取り上げ、漢和辞典の引き方等を図解した後、日本語と中国語の意味の違いを調べる活動を設けている。これらの学習活動は、今話題のアクティブ・ラーニングといえるだろう。

(4) コラム（古文の窓、漢文の窓）

「古文の窓」は、知識として持っている古文の理解が深まり、楽しみが膨らむようなテーマを選び、その充実を図った。図版を多用し、生徒が思わず読みたくなり、しかも一人で読み進められる内容に仕上げていく。

また「もっと読みたい！」コーナーでは、生徒に親しみやすい図書を紹介し、主体的な読書を促した。同様に「漢文の窓」では、熟語や文学史の理解の助



Q 教科書コラムをどう使う？

教科書に1ページか2ページのコラムがいくつか掲載されています。なかなか面白いことが書かれているものもあり、授業でうまく扱いたいと思うのですが、実際には生徒に「各自で読んでおくように」と指示するだけで終わってしまっています。コラムを授業で効果的に扱うための何かよい方法があったら教えてください。

山梨県・38才女性

A 山下 直

文教大学教育学部准教授

コラムは教材へ興味を喚起する「読み物」として、単元の学習指導とは別のところで扱うことが多いかもしれません。もちろんそれでもよいのですが、扱い方によっては、単元の学習の導入の「問い」を立てたり、単元で学習したことをさらに発展させる学習に結びつける「問い」を立てたりするこ

とができます。

例えば『精選国語総合新訂版』の「水の東西」の後のコラム「思考を深める① 説得の方法」を見てみましょう。手紙と電子メール、弁当と給食、固定電話と携帯電話を対比し、その相違点を書き出すという課題が示されています。この作業を経験してから本文の学習に入ると、「鹿おとし」と「噴水」の相違点を捉えさせるときにスムーズに学習が進むことが期待できそうですね。

「セメント樽の中の手紙」の後にはコラム「表現を味わう② 文体をとらえる」があります。「セメント樽の中の手紙」の学習の後に課題1・2に取り組んでみましょう。「羅生門」「鏡」「城の崎にて」「夢十夜」の語り手や文末表現を比較してみるといって学習です。これによって、文体の効果について考えさせる比べ読みの活動につなげることができるでしょう。

また、課題が設けられていないコラムであっても、そのコラムに教材の内容と絡んだ部分があれば、そのコラム本文から「問い」を立ててみることで、単元の導入や単元の学習後の発展に生かしてみましょう。

このように、コラムには単元の学習を円滑に行う「問い」を立てるための手がかりが、多くちりばめられています。授業の進め方やまとめ方に困ったときには、コラムの中にその手がかりを捜してみてもいいでしょうか。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

読んできた本、 読んでほしい本 ⑨

うえむら かずみ
植村和美

大阪教育大学附属高等学校池田校舎



本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介します。

■はるかな物語へ

高校1年生の夏、部活後の更衣室で開いた一冊の本に、のめり込んだ。下校間際の明るい喧騒、窓降り注ぐ夕刻の厳しい日ざしを感じる中、ただ無心にページをめくった。気がつくとも周囲は静まり返り、全員下校したはずの更衣室は、外からさきつちり施錠されていた。とんでもない……とあわてふためき、天井近くの空調用押し上げ窓から荷物を投げ出し、自分の体もねじりこんで、這い出すように脱出したのを覚えている。高校生になってほごない私を、いきなり魅了した今も鮮明な本。田地文子訳『源氏物語』第一巻「桐壺」。貴公子と姫君たちが織り成すみやびな王朝世界、情緒あふれる自然描写、研ぎ澄まされた感性で告出さ

れる深層心理。一卷ずつ読み進め、ほぼ丸一年かけて全巻を読み終えた。

今、高校の国語教師になり、原文を読みつつ手元に『湖月抄』（北村季吟）を置く。

「めをそばめ」⑤正躰にむかはぬ心なり」

「まばゆき」玉拾遺に、日のかがやくときまばゆくて、見がたきやうの意なるべきにや、といへるごとくにて、なべて人に目をそばめらるる、これまばゆきなり」。一語ごとに、言葉の地平が広がる。身分制度にアイデンティティーを見出す上達部・上人達は、桐壺の更衣と桐壺帝がうかつに踏み込んだ「日のかがやく」ような純粹な愛の「正躰」に、正面から向き合うはずはなかった。実像を見ることが、強固なヒエラルキーの崩壊につながりかねない。自由意志・自然恋愛がタブーとされ、文学が権力者への奉

仕行為であった時代に生きながら、作者は、枷をはずした文学者の眼でかがやくものを正躰から正視し、納得したからこそ、正躰に向かわぬ人々を切り出し、描き出したのだと思う。

一途に引きずり込まれた学生時代も、教壇に立ち高校生とともに一語一語解釈を進める今も、作者の見つめた平安世界が私の心に染みしてくる。千年以上の昔、ままだらぬ社会において、ままだらぬことをままだらぬと知る一人の女性が、物語を読み継ぐ千年以上の確かな営みに支えられ、時代の確かな手ごたえや質感を私達に残してくれた。『源氏物語』をめぐるたび、平安時代は紫式部によってもたらされ、そして物語を愛する営みに支えられ、私たちは今ここでこうして繋がっているのだと嬉しく思う。



語彙力・漢字力を育み、豊かな表現力を

たかくさ まちこ
高草真知子

麗澤大学・中学高等学校講師
大修館書店教科書編集委員

■教科書の欄外や手引きの活用

高校生の語彙力、漢字力が低下していることは、先生方も実感されていることでしょう。「漢字テストや単語テストを繰り返してやっているのに、どうも定着しない。」と感じている方（私もです！）、教科書のこんな点にも着目してはいかがでしょうか。大修館の『精選国語総合 新訂版』の下欄には、次のようなコーナーがあります。（「羅生門」より）

語句	語句
ひととおりではない	大目に見る
もとより	存外（非常外）
▼日の目	平凡（≠非凡）
地震（震動・震え）	冷然（当然・天然）
顧みる（↓省みる）	

『精選国語総合 新訂版』（国総346）の「語句」欄・「漢字」欄

⬆は類義語、⬆は対義語を表します。（ ）内には、「震」や「然」を用いた別の熟語や読みの違う語句を示しています。⬇は関連する語で、「顧みる」と「省みる」の違いを調べさせるといふものです。これをチェックすると、本文に出てきた五つの語句だけでなく、さらに七つの語句に触れさせることになります。倍以上ですね。しかも、作品の文脈の中でとらえるので、語句の意味も理解しやすいのではないのでしょうか。

また、下欄には慣用表現を中心に、注意すべき語句も取り上げられています。

さらに、ここに挙げた語句とリンクして、「学習のポイント」の「語句と漢字」には次のような問題が設けられています。生徒が苦手な慣用句も、この例文を繰り返し音読すれば、言葉も意味も正確に覚えられるでしょう。

語句と漢字
① 次の空欄に入る語句を考えてみよう。
② 言葉の通じない外国で道に迷い、（ ）に暮れた。
③ 地道な研究がようやく日の（ ）を見た。
④ 簡単にできると（ ）をくくっていた。

『精選』の「語句と漢字」

ここで紹介した学習は、授業で扱う時間がなければ、予習にしたり定期考査の範囲にしたりして、自学させましょう。大学入試センター試験の漢字や語句の対策にもなります。ぜひ使ってみてください。『新編』『分冊』も、漢字や語句のコーナーは充実しています。特に『新編』の「漢字レベルアップ」は、本文とは別の読みの問題を出して（たとえば、「間隔」↓「隔てて」など）、自然に語彙が増えるようになっています。

■コラム「表現を味わう」（『精選国語総合 新訂版』）

『精選国語総合 新訂版』には、「表現を味わう」というコラムが四つあります。その中の「①レトリックの効果―描写・比喻・オノマトペ」（53頁）には、直喩（明喩）、隱喩（暗喩）、換喩、擬人法、擬音語・擬態語の意味と効果について書かれています。「羅生門」は比喩の宝庫ですが、教科書の例文（「羅生門」や「水の東西」など）を使って説明されているので、わかりやすく、説得力があります。これまで板書していた内容がすっきりとまとまっているので、これからはもうこのページを開けばいいんだと思うと、嬉しくなります。

また、もう一つご紹介したいのは、同じく「表現を味わう」の「③短歌・俳句の修辞―句切れ・倒置・その他」（57頁）です。

俳句の学習でまず確認するのは、季語と季節、切れ字、句切れですが、このコラムでは、それだけではなく「取り合わせ」と「一物仕立て」についても取り上げています。これを読むと、俳句には取り合わせの面白さをねらった句と一点に集中して詠んだ句があるということがわかります。このことを意識すると、俳句の鑑賞はさらに豊かになります。

語彙が増えれば、世界が広がり、思考が深まり、表現が豊かになります。私たちはそのお手伝いをしていると思うと、教室に向かうテンションが少し上がりますね。

取り合わせ ……季語と、季語とは関係のないものを組み合わせる句。 秋風や模様のちがふ血二つ 原石鼎 * 季語の「秋風」とは直接関係のない、「血」を組み合わせている。 一物仕立て ……季語に意識を集中し、その状態や動作を詠んだ句。 桐一葉日当りながら落ちにけり 高浜虚子 * 季語は「桐一葉」。桐の葉の様子に意識を集中して一句を形成している。
課題 2 教科書の俳句について、右の表現技法を指摘してみよう。

「表現を味わう③ 短歌・俳句の修辞」



【特集】次世代につなぐ「国語総合」

大修館「国語総合」改訂版3点 新教材のご紹介

新教材のご紹介

大修館「国語総合」改訂版3点

鷺田清一、内田樹、國分功一郎、西研など、
人気の哲学者たちの評論。

池谷裕二、福岡伸一、中村桂子など、

自然科学分野の魅力をわかりやすく紹介する科学者たち。

茂木健一郎、小熊英二、平川克美、池内紀など、

思考を促し問題意識を喚起する論客たちの文章。

梨木香歩、林京子など、

人の心の機微を巧みに掬い取り、結晶させた文学作品。

大修館の「国語総合」の三点から、

魅力あふれる現代文の新教材を一举にご紹介します。

精選国語総合 新訂版 (国総 346)

茂木健一郎「挑戦」【随想】

縄跳びに挑戦する小学生も、一〇〇メートル走で世界記録を目指すアスリートも、その「挑戦」には共通した性格がある。筆者の少年時代を回想しつつ、人類にとって「挑戦」の意義、人生にとっての「挑戦」の価値を述べる。これからの高校生活でさまざまな挑戦をする生徒たちに贈るメッセージ。

西研「尋ねあい——自由な主体への成長」【随想】

「自由」と「人権」は、現代社会で実現されているだろうか。十八歳から選挙権が認められるようになった今日、高校生は社会を構成する市民となる入り口に立っている。その自覚を促し、よりよい社会を築くための「尋ねあい」他者とのコミュニケーションの意義を述べた教材。

池谷裕二「まずは形から」【評論】

鉛筆を横にくわえると楽しくなる！身体が心に及ぼす影響を、興味深い実験結果から多数紹介。わかりやすい語り口で人気の脳科学者による平易な評論で、自然科学的思考への導入にもなる。正しい姿勢が学習効率向上につながるという実験の紹介もあり、学習態度を整えるためにも役立つ。

田中ゆかり「方言コスプレ」現象【評論】

いまや「方言」は「誇らしい」「かっこいい」「みせた」ものになった。かつて「恥ずかしい」「隠したい」ものだった方言の価値の変化の背後には何があつたのか？ 方言をテーマに社会の変質と言葉の変化の関係を論じ、SNSなど新しいメディアがもたらしたインパクトまで考えさせる。

福岡伸一「動的平衡としての生物多様性」【評論】

地球上の生命が、物質・エネルギー・情報を絶えずパスし合いながら均衡を保っている状態を、「動的平衡」という。この動的平衡を支えるのが、「持ち場ニツチ」を分担し合いながら多様な生物が共生すること、すなわち「生物多様性」だ。人気の生物学者が生物多様性を守る必要性を論じた評論。

鷺田清一「技術としての『教養』」【評論】

「知識」としての教養から、「技術」としての教養へ。価値観が揺らぎ多様な社会問題が山積する現代社会を生きて抜くためには、他者とコラボレートできる真のプロフェッショナルが必要だ。科学技術の現状に警鐘を鳴らしつつ、複眼的な知性の大切さを論じる。「国語総合」の総まとめとなる本格評論。

國分功一郎「贅沢を取り戻す」【評論】

気鋭の人気哲学者が、消費と浪費の違いを述べつつ、消費社会の問題点を突き、その隘路から抜け出すための道として、「贅沢を取り戻せ」「楽しむ訓練をせよ」と説く。身近な話題から生活の倫理へと主張を展開する論理を学びつつ、筆者の主張に賛成・反対両面から考えを深めることもできる。

林京子「友よ」【小説】

女学生時代に長崎で被爆した旧友と三十年ぶりに再会した「私」は、初めて知らされた友の真実に、女学生時代の自分の行動を悔いる。自身も被爆者である著者によって描かれた原爆のもたらした傷跡から、平和の尊さを考えさせつつ、文学的テーマをも追究する、新しい平和教材。



左奥：
「新編国語総合 改訂版」(国総347)
手前：
「精選国語総合 新訂版」(国総346)
右奥：
「国語総合 改訂版 現代文編 古典編」
(国総344・345)

池内紀「富士山のカタチ」 【評論】

実物を見ないで富士山を描くと、実物よりはるかに鋭角のすらりとした姿になる。「富嶽百景」で太宰治が言及した葛飾北斎の描く富士山、明治期に来日した外国人の描いた富士山など、豊富なエピソードを、鮮やかな図版とともに紹介し、私たちのものの見方、認識の枠組みについて考えさせる。

西研「自由な主体に必要な『尋ねあい』」 【評論】

人々はこれまで「自由」を中核とした社会を目指してきた。しかし、現代社会でそれは実現されているだろうか。筆者が大学のゼミで体験した「尋ねあい」は他者とのコミュニケーションの経験をふまえて、よりよい社会を築き上げていくために必要なことは何かを説く。

*『精選国語総合 新訂版』収録の「尋ねあい」と同一の出典に基づきつつ、評論として増補・加筆したもの。

小熊英二「人は独創的でありたいか」 【評論】

「独創的でありたいか否か」という問いに答えるためには、まず、「独創的」とは何かを考える必要がある。近代社会と前近代社会との比較を通して、「独創的」であることを評価する社会のしくみ、そこに潜むジレンマをえぐり出す。『民主』と『愛国』等で人気の評論家が教科書に登場。

中村桂子「知る」ことと「わかる」こと 【評論】

「知る」と「わかる」とは異なるのか。山中伸也が世界で初めて作成に成功し、ノーベル賞を受賞したiPS細胞を具体例に、両者の違いを論じ、「知る」ではなく「わかる」ことの大切さを問ひかける。最先端の生命科学の分野をわかりやすく紹介しつつ、科学との向き合い方を考えさせる評論。

別役 実「万言の時代」 【評論】

劇作家である筆者のもとに届いた「やめえ」（病気）という上演台本。それは筆者の戯曲の方言版だった。メディアによって全国に公用語（共通語）が普及した現在、方言で話すということは、どのような意味を持つのか。混沌とした現代において、「肉声をやとりする現場」の価値、方言のもつ力を、改めて見直す。

平川克美「グローバル化とグローバリズム」 【評論】

「グローバル化」と「グローバリズム」は違う。グローバル化が民主主義や科学技術の発展を背景にした自然過程であるのに対し、グローバリズムはアメリカを中心とする国々の国家戦略とかかわりが深い。ローカルな慣習や文化を破壊するグローバリズムの問題点と、グローバル化の可能性を論じる。

多木浩二「消費されるスポーツ」 【評論】

スポーツはメディアを通して、会場にいない人までも熱狂させる。そのとき、スポーツは観客を消費者としてとらえ、消費者を飽きさせない物語を生み出し続けなくてはならない。生徒に身近なスポーツを取り上げ、大衆消費社会・メディア社会との関連を鮮やかに論じる。

梨木香歩「コート」 【小説】

「私」と姉の間をつなぐ一つのコート。主人公の「私」が、二人を何より結びつけていたその「コート」をよすがに、姉との思い出を回想する短編小説。『西の魔女が死んだ』、『家守綺譚』などで人気の作家による、巧みな設定と構成の妙を味読したい。

内田 樹「意味と身体」 【評論】

言葉だけがあって、身体的実感が伴わない。逆に、身体的実感はあるが、言葉にならない。言葉は、このような「絶えざる不均衡」から生まれてくる。言語おける創造性の秘密に迫り、「オリジナル」であることにこだわって他者の言語を取り込むことの大切さを忘れた日本の言語状況に、警鐘を鳴らす。

田中真知「おまえはやって来た」 【随想】

「おまえはやって来た」「そう、おれはやって来た。」…延々と繰り返されるアフリカ人の挨拶。この一見冗長にも思われるやりとりの中から、人間同士の真の意味でのコミュニケーションとはどうあるべきなのか、その本質を問ひかける。別世界を通して「生」を考えさせる、感動的な随想。

齋藤 孝「人生は『動詞』で変わる」 【評論】

人間の行動は「動詞」の集積である。動詞の持つ意味を見つめ直し、自分と親和性の高い動詞を意識し、その動作を取り入れることで、自分の生活や心構えが変わってくる。『声に出して読みたい日本語』などで有名な齋藤孝が、言葉と生き方のスタイルとの結びつきについて語る新教材。

石垣りん「崖」 【随想】

第二次大戦末期、追いつめられて崖の上から飛び降りて自死した女性たちの悲劇を詩に結晶させた作品。今日を生きる私たちにも鋭い問いを突きつける平和教材。

国語と文学と哲学

野矢 茂樹

一九五四（昭和二九）年生まれ。哲学者。東京大学大学院総合文化研究科教授。主な著書に『論理学』『心と他者』『哲学の謎』『語りえぬものを語る』などがある。

考える力の育成をめざさなければいけないと、しきりに言われる。それはその通りだと思う。しかし、それを国語の授業でやるというのは、筋が違う。なんでもかんでも国語という科目に放り込むとする。国語の授業時間がふんだんにあり、教員にたっぷり余裕があるというのなら、それでもよい。だがそうでないなら（そうじゃないでしょう？）、国語という科目をもっと純粋な日本語教育に限定すべきである。

日本語の言語能力を鍛える、語学としての国語。そこからは文学教育を切り離していただきたい。文学教育はそれ自体重要なものであるから、「文学」という科目を作

る。ちょうど「英語」が英文学とは区別されるように、「国語」も文学とは区別される。では、国語という科目を語学教育として純化したとして、そこに「考える力の育成」はどう入り込むだろうか。

いや、入り込まないし、入れるべきではない。考える力を育てる授業と純粋な日本語教育としての国語はまったく違う授業になる。「考える」とは、問題を抱え、何かヒントにならないかとあらゆるものをその問題に関係づけ、アンテナを張っている状態である。そして新しい発想につながるものが現れたときには、逃さずにそれをつかまえる。虎視眈々と、問いの緊張を失わずに、

アンテナを鋭敏にし続けること、それが「考える」ことにはかならない。

だから、どこかに正解が書いてあるという状況では考える力はなかなか育たない。インターネットで解答を検索したり、あるいは先生に質問すればよい。考える力を育てるには、そんな状況から離れねばならない。そこで、哲学が役に立つ。哲学の問題はどこかに正解が書いてあるというものではない。アリストテレスであれカントであれ、誰もが答えの途上であり、「心とは何か」「幸福とは何か」「人生の意味は何か」といった哲学的な問題に対する答えが哲学書に書いてあるというわけではない。もち

ろん、教師も正解を知りはしない。

いま、小・中学生に対する哲学教育が模索され始めている。哲学の知識を教えるのではなく、考える力・議論する力を育てる最良の方法として哲学教育が試みられているのである。（詳しくは河野哲也『子ども哲学』で対話力と思考力を育てる』（河出ブックス、二〇一四）などが参考になる。）そこでは、正解に到達することではなく、答えに向けて一歩でも前進することがめざされる。まだ不完全だけれど、最初よりも分かってきた。自分の考え方とは違う新しい考え方に目を開かされた。正解にたどり着いたことではなく、考える過程での充実が、授業での達成感になる。そうして、分からない問題でもすぐに諦めてしまわない知的忍耐力が鍛えられてくる。考える力を育てようとするならば、そんな授業を作っていかなければいけない。

それに対して、純粋な日本語教育としての国語は、実用的な（それゆえ文学的ではない）読解力・文章力・コミュニケーション力の育成をめざすものとなる。ここで求

められるのは、何か新しいことを思いつく力ではない。書いてあることを正確に読み取り、伝えたいことを的確に表現する力。外国語を学ぶときに何度も繰り返し練習して体に覚えさせるように、母語たる日本語をもう一度しっかりと学びなおし、言語という道具を生活の中で使いこなすために必要な技能を鍛えるのである。

語学としての国語教育において、やるべきことはいくつもあるが、その中から読解力を育てる授業に関する一つのイメージを述べてみよう。最初生徒たちは、文章を一文ごとにとらえらばらに、すべての文を同じ重みで読んでいくという読み方しかできないかもしれない。そこで第一段階として、文章には幹（だいいな部分）と枝葉（補足的な部分）があるのだということを分からせる。そして、枝葉を刈り取って骨格を捉える練習をする。そのためには要約させることがひじょうに有効である。要約しやすい文章からだんだん難しい文章へとレベルアップしつつ、反復練習をする。

幹と枝葉を見分ける力がある程度ついて

きたら、文章の構造を捉える練習に進もう。文と文、段落と段落といった、文章を構成する各パーツがどのように関係しあっているかを組み立てられているのか、それを読み解く。最初生徒たちは文章を一行目から順に一回だけ読んでそれでよしとしていたかもしれない。だがそうではなく、何度も行きつ戻りつしながら、文章全体を捉えつつ、その構造を捉えていく。そのような分析的な読み方を身につけさせるのである。これも、大まかで単純な構造の文章から始めて、だんだんと緻密な文章、複雑な構造をもった文章へと進んでいく。

たんに知識として学ぶのではなく、一つのポイントを反復練習する。そして中学・高校と六年間かけて、徐々にレベルアップしていく。ああ、そんな教科書があったなら！しかし、現実には目を向けると、国語の教師たちは少ない時間をなんとかやりくりして、実用的な日本語教育も、感動的な文学教育も、深い思考力を育てる哲学教育も、すべてやらされようとしている。悲劇的な状況だと、私は思う。

二〇一五年の年末、「高大接続システム改革会議」において、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の問題イメージが公表されました。今回は、このテストでどのような能力が求められているのかに迫ります。

「高大接続システム改革会議」で検討されている「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の具体的な問題イメージが「高等学校基礎学力テスト(仮称)」に先がけて公表された⁽¹⁾。

新テストの眼目は「知識・技能」に加えて「思考力・判断力・表現力」を問うことにある。設問のあり方は、大学入試センター試験のような選択形式ではなく、解答自由度の高い記述式や小論文でもなく、いわば条件付記述の形式(PISA調査型)をとると言えそうだ。つまり答えが一つに定まらない問いに対し、一定の条件を設定した上で、結論や結論に至るプロセスを解答させるものとなっている。

そのプロセスを評価するにあたり、国語科では次のような観点が示されている。今後の授業内容を組み立てる上で着目しておきたい(太字・傍線、数字は筆者による)。

「多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等から得られる情報を整理し、概要や要点等を把握する(①)とともに、**他の知識も統合して比較したり推論したりしながら自分の考えをまとめ、他の考えとの共通点や相違点等**を示しながら(②)伝える**相手や状況に応じて(③適切な語彙、表現、構成、文法を用いて効果的に伝えること(④)。**」

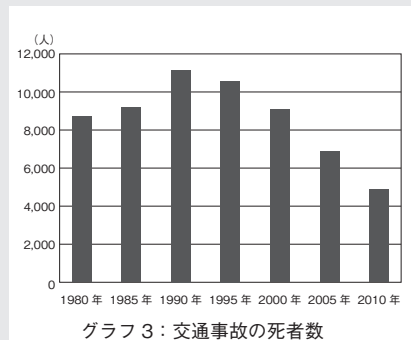
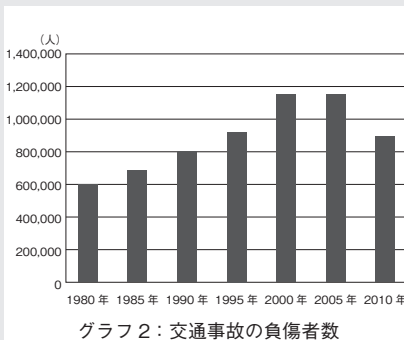
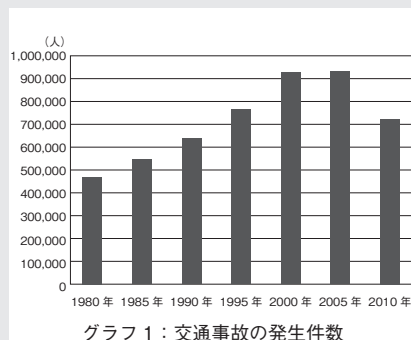
①④の諸能力を涵養するには、①非言語資料を含む多様な学習材を用いる、②協働的作業を行う、③多様な表現方法(発表、要約、作図、記録、論述)をとる、④振り返りによって効果の検証、改善を行う等の方法が考えられる。

むしろ、これらの諸能力を培う上での前提は、内容に対する十分な知識と本質的な理解力であり、従来の「読解」指導も必要である。従前の講義型授業に加え、新しい授業方法をどう取り入れるか、授業者の工夫が求められる。

【参考資料】「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」記述式問題イメージ⁽²⁾

〈例1〉次の文章とグラフを読み、後の問いに答えよ。

次に示すのは、警察庁事故統計資料に基づいて作成された交通事故の発生件数、負傷者数、死者数のグラフと、この3つのグラフを見て、交通事故の死者数が他よりも早く、平成2年(1990年)以降減少傾向になっていることについて、4人の高校生が行った話し合いの一部である。



Aさん：交通事故の死者数が他よりも早く、平成2年(1990年)以降減少傾向になっているのは、交通安全に関する国民の意識の変化が関係しているのではないかと思います。その裏付けとなる資料として、「交通違反で検挙された人数の推移が分かる資料」があると思います。その資料を見れば、飲酒運転やスピード違反など、死亡事故につながるような重大な違反の割合が少なくなっていることが分かるはずです。

Bさん：私は、この30年間で販売されてきた自動車の台数と安全性に関係があると思います。(a) つまり、自動車の台数は年々増加し続けているので事故件数と負傷者数はなかなか減らなかったけれども、(ア)ということです。例えば、最近30年間における、「車の総販売台数の推移が分かる資料」と、「車の安全に関する装置の装備率の推移が分かる資料」があれば、このことを裏付けることができると思います。

Cさん：私は、交通事故の死者数が平成2年（1990年）以降減少傾向になっているのには、医療の進歩がかかわっていると思います。交通事故にあって救急車で運ばれ一命を取り留めた人が、搬送先の病院で、「以前であれば助からなかった」と医師に言われたという話を聞いたことがありました。ということかという、昔は事故にあって助からなかった命が助かるようになってきたので、事故の数は増えても亡くなる人は減り続けてきたのではないかと思います。その裏付けとなる資料として、例えば、交通事故における救急車の出動回数の推移と救命率の推移が分かる資料が考えられます。その資料を見れば、（ イ ）のではないのでしょうか。

Dさん：私は、みなさんの意見を聞いて、次のように話し合いの内容を整理してみました。Aさん、Bさん、Cさんは、3人とも、3つのグラフを比べて1つのグラフだけが異なる傾向を示している現象に着目し、その要因について仮説を立て、その根拠として考えられる資料を挙げて、その資料から推測される内容を述べられました。これから、皆さんの仮説を検証するための検討や資料収集をしていきましょう。（以下、省略）

問1 Bさんは、下線部（a）「つまり」以下で、どのような内容を述べることになるか。空欄（ア）に当てはまる適切な内容を40字以内で書きなさい（句読点を含む）。

問2 空欄（イ）でCさんはどのように発言したでしょうか。あなたが考える内容を、80字以上、100字以内で書きなさい（句読点を含む）。

〈解答例〉

問1 ア自動車の安全性が向上してきたので、死者数は減ってきた（26字）

問2 イ救急車の出動回数については交通事故の発生件数や負傷者数とほぼ同様に上昇傾向で推移しているのに対し、救命率については死者数の推移とは逆に上昇傾向で推移していることが分かる（84字）

〈例2〉3つの文章を読み、そこで語られている状況、問題、解決法に関する共通点について考察し、お互いに連動する複数の選択肢群から各々一つの選択肢を選ぶとともに、それを踏まえた記述を行う問題（組合せに応じた複数の解答が成立する）。

〈例3〉1,400字程度の新聞記事を、一定の目的に添って読み取り、得られた情報を取捨選択したり、自分の考えを統合したりしながら、新たな考えにまとめ、200～300字で表現する問題。

(1) 3月に行われた第13回会議では「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の問題イメージも公表された。
(2) 「高大接続システム改革会議（第9回配布資料）」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/shiryo/1365554.htm）より抜粋。〈例2・3〉の問題イメージも、同資料を参照。

■アフリカ社会における「国語」の複雑さ

今回、アフリカの高校の国語について、何か書いてほしい、と問題をいただき、ハタと悩んでしまった。「国語」という日本語を英語に直訳したら、National Languageだろうか。アフリカにおいて、National languageが何で、どうあるべきか、という議論自体、歴史上、複雑な意味を持ってきた。アフリカ大陸には、八〇〇とも一〇〇〇とも言われる数の言語がある。本稿では、西アフリカのガーナという国を中心に書かせていただくが、ガーナにも八〇言語ほどあると言われている。公用語は英語で、政府が認定している主要な言語が一一ある。トウイ語の母語話者が一番多いとされるが、トウイ語も大きく分けて二つのグループがあり、また、民族間の混血や移住も多いので、特に都市部では、一つの教室で学ぶ生徒が、全員同じ母語ということとは、まずないと言っていだろう。

アフリカには植民地支配の遺産として、英語圏、フランス語圏、ポルトガル語圏といった、旧宗主国の言語による区分がある。こうした語圏は、単に、歴史上の分類ではなく、公用語、教育を含む様々な行政制度、そして人々が心理的・物理的に繋がりを持つヨーロッパの国や文化という、目に見える形で明確に異なっている。しかし、その基

「WEB国語教室」連動

世界の「国語」教育事情 第10回

ガーナ

山田 肖子 名古屋大学

日本の「国語」は、日本語を日本語で教えています。当然のことのようにも思えますが、多言語・多民族国家の多いアフリカでは事情が異なります。西アフリカのガーナを中心に、アフリカの「国語」事情に迫ります。

底には、多様な言語を持った伝統的な文化集団が分布している。例えば、ガーナの多数派言語であるトウイ語を話すのは、アカン系と言われる人々だが、アカン系は、ガーナのみならず、コートジボアールまで広がっていて、国境の外に親戚がいる人も多い。しかし、コートジボアールの公用語はフランス語で、国家としては、ガーナは英語圏のナイジェリアやガンビア、シエラレオネ、リベリアと地域連合を組むことが多い。

このように、制度、文化、言語が複雑に入り組んでいるアフリカの国々では、学校での教授言語を何語にするか、何を「国語」として教えるか、というのは、一方では政治・イデオロギー色の強い議論に、他方では、学習効率とか卒業後の就業可能性といった、実利的な議論につながるが、いずれにしても、国を二分しかねないテーマなのだ。

■ガーナにおける教育言語の議論

ガーナは一九五七年に、アフリカの最初の独立国となった。その後、相次いでアフリカ諸国が独立し、一九六〇年代は「アフリカの世紀」と言われた。植民地時代末期から独立後間もない頃は特に、英語やフランス語などの宗主国の言葉は、植民地支配の抑圧の歴史に戻ることでとして、強い反発を受けた。それは、アフリカの政治指導者た

ちが、自らの正統性を、ヨーロッパ批判によって裏付けようとしていた側面もある。しかし、多言語社会では、ヨーロッパ言語の代わりに他の一つの現地語を取り上げることも政治的には問題をはらんでいる。現に、独立後、英語を排除してスワヒリ語を公用語にしたタンザニアでは、スワヒリ語をすべての民族に強制したとして、スワヒリ帝国主義との批判も受けたのである。国家としての統一性と独自性を醸成したいが、多様性に配慮しなければ支持は受けられない。こうしたアフリカ社会の政治的アンビバレンスが最も端的に表れてきたのが、教育言語の問題なのである。

さらに、ガーナでは、政府が認定した一一の主要な言語があると述べた。私がアフリカに関わり始めた九〇年代後半や二〇〇〇年代には、現地語教育のための教科書開発などを支援する援助機関の動きがあった。ガーナでは、ドイツ政府援助機関の肝いりで、主要言語の教科書を開発していた。最初は四〇五言語の教材を実験的に作って、その後拡大する計画だったが、結局、実験段階で終わってしまったように記憶している。援助機関のスタッフは、母語で学んだ方が、特に低学年のうちは学習効率が高いとか、文化的アイデンティティを保つ必要があるとして、現地語教育の重要性を

内容は、日本のように、物語やエッセイ、詩といった異なる様式の文学をたしなみつつ文法や文章作成を学ぶというのとは少し違う。アサント族の古い寓話がある一方、身近な環境や生活習慣といった「生活科」のような内容から、家族やコミュニティでの課題を考えさせる道徳的な内容、歴史上の偉人や伝統的首長の逸話、現代ガーナの民主制度、経済などまで、題材はさまざまである。

アフリカの多くの社会は、もともと、文字を持たず、口承文化が発達していた。したがって、トウイ語をはじめとする現地語をアルファベットで表記すること自体が、ヨーロッパ人宣教師による発明であり、土着の人々が行ったことではない。日本のような、文字による伝達を基盤とする社会では、文章表現の美しさ、巧みさ、そこに見られる個性や実験などが、文学という独自の芸術を形成する。しかし、アフリカの芸術の多くは、音楽、絵画、舞踊などであり、文字の芸術は、一九世紀末から二〇世紀に興ったものである。植民地時代末期には、ポスト植民地主義文学というものが生まれ、支配への抵抗や独自の文化の発露ですら、ヨーロッパ言語を用いて行われていることの矛盾を訴え、現地語で文学表現を行った者もいた。しかし、いまだに、そのような現地語文学を愉しみ、

GHA



ガーナの小学校での授業風景



訴えていたが、そもそも、一部の言語だけを抽出して、様々な母語をもった生徒がいる教室で使うことに、どれほど妥当性があったのか分らない。また、親の反応は、英語で読み書きや会話ができたほうが余程、いい仕事に就けるし、わざわざ学校に行つてまで、家でも使っている現地語を学ぶ必要はない、というのが大勢である。

アフリカの多くの国では、近年は、初等教育の最初の数年は現地語を用い、その後は英語やフランス語などの国際語を教授言語としている。ガーナでは、現地語教育は最初の三年間だけだ。実際の教室を観察すると、教師は、(しばしば複数の)現地語と英語をチャンポンで使っていることが多い。従って、教授言語の区分もあいまいではあるが、公的教育制度のほとんどの段階で、英語が用いられている。また、科目としての「国語(二言語のうちどれか)も、一応、前期中等教育(中学)までは必修だが、後期中等教育(高校)では、選択科目になってしまつて、履修しない生徒も多い。

■ガーナの小学校の「国語」教科書

そんなわけで、高校の「国語」について語るのはなかなか難しいので、ガーナにある主要な「国語」の一つであるアサント・トウイ(トウイ語の一つ)の小学校教科書を少し紹介しよう。

才能を醸成する土壌はあまり発達しているとは言えない。したがって、「国語」教育は、表現自体の中に価値を見出すのではなく、独自の歴史や文化、伝統を「情報」として伝える場であり、「国語」は、そうした情報伝達のメディアとして機能的に習得される。

■おわりに

ガーナでは、現地語の新聞やテレビ番組も多い。現地語及び土着の文化を称揚する議論は常にメディアを賑わわせている。にもかかわらず、学校で「国語」を学ぶ必要は、援助機関や研究者などの外部者が喧伝するほどには、ガーナの大衆には認識されていない。植民地時代から、学校、そして文字文化は、伝統を伝える場ではなく、植民地政府での雇用やヨーロッパへの留学につながる、むしろ伝統と切り離された栄達の象徴であった。

今回、「国語」というお題をいただいて、私自身、日本は、教育課程すべてを通じて、国語を必修とすることが当然と認識されるほど、古典から現代文学まで、一つの表記言語の命脈が、社会の諸相や人々のアイデンティティと切り離せないものなのだ、そしてそれが、これだけグローバル化した現代でも揺るがないというのは、稀なことなのだと改めて感じ入った次第である。

『坊っちゃん』のなかの

「漱石コード」を探索する

むらき
村木
あきら
晃東京学芸大学・横浜美術大学・
東京未来大学非常勤講師

今年の正月、新春ドラマスペシャルと銘打って『坊っちゃん』がテレビ放映された。嵐の二宮和也演じる坊っちゃんは、誰もがイメージする坊っちゃん像を見事に演じていたように思う。

原作と異なる展開が随所にみられるのだが、中学校の国語教科書等で、初めて『坊っちゃん』に触れたときの読後感に似たものを多くの人は感じたかもしれない。教科書の、その掲載の仕方とも関係がありそうだ。

このドラマが放映された背景には、今年（二〇一六年）が夏目漱石の没後一〇〇年、『坊っちゃん』が『ホトトギス』に発表されてから一一〇年目に当たることがあるだろう。もう一つだけ添えるなら、『坊っちゃん』の舞台となった

松山中学の英語教師を漱石が辞してから、今年で一二〇年となることも付記しておきたい。

漱石コード

大岡昇平は『坊っちゃん』について、「なんと繰返してもあきない快楽」を与える傑作で、自身も数十回（四十回？）は再読したと書いている。（小説家 夏目漱石）

名作、傑作といわれる小説は、読み返す度に新たな発見があり、前回とは異なった読み方もでき、奥行きの高さに気づかされる作品を言うのだ、と大岡は指摘しているのだろう。たとえば、先の新春ドラマに見て取れる、爽快な熱血教師の二宮坊っちゃん像から、孤高で哀愁を帯びた、喪

失感の漂う坊っちゃん像に気づいていくこと等も、『坊っちゃん』再読の「快楽」なのだと思う。

姜尚中は、漱石作品のなかに隠された、そういった発見や気づきにつながる意味を、「ダ・ヴィンチ・コード」に引っかけて、「漱石コード」と呼んでいる。

私も、大岡氏には及ばずも、何度となく『坊っちゃん』を再読してきた。そして、この年齢になって改めて手にしたとき、学生だったときにも、新米の高校教師だったときにも気づかなかった「漱石コード」が浮かんできた。それは確実に、自分の「成長段階」に合わせて見えてくるものに違いない。

ここでは、「ある私立の中学校」「六〇〇円」という語句や、坊っちゃんが繰り広げる授業や生徒指導対応シーンの文脈から、そのほんの一端を紹介してみたい。『坊っちゃん』鑑賞の際の、新たな読み方や気づきの一助にしたいだければ幸いである。

超高学歴の坊っちゃん

多くの人は、能力の高さと地位を利用して権謀をめぐらす赤シャツと、対人関係やコミュニケーションが不得手で直情的な坊っちゃんとの対比で『坊っちゃん』を読んできたと思われる。正直だが軽佻な面があり、教養も思考力も

帝大卒の赤シャツには遠く及ばないと見える坊っちゃん。そんな人物が赤シャツたちの権威と真つ向対決するから痛快なのだが、「いつたい、きちんと学校教育を受けてきたのか」とも思ってしまう。

そこで、坊っちゃんの学校歴を精査してみよう。

まず、小学校までは描かれていない。分かるのは、中学校（もちろん旧制中学）からだ。漱石は「ある私立の中学校」を坊っちゃんの出身校とさせている。実は、この五年間の中学校を卒業した段階で、坊っちゃんは、男子二〇歳人口の「三・一％」しかない学歴者となる。旧制中学に進学して卒業した人（あるいは、それに相当する人）は、「二〇〇人に三人」に過ぎなかったのである。

ただ、坊っちゃんの学歴はここで終わらない。「前を通りかかった」との理由で、「物理学校」に入学。規定の三年間で卒業してしまう。このこと自体が、厳しい進級規定をパスした真の実力者であることの証なのだ。この伝統は、「物理学校」の後身「東京理科大学」に継承されている。そして、このレベルの学歴者は、なんと「〇・二％」。「千人に二人」の超エリートなのである。

四〇円もの高額の初任給が保証され、「社会の上流」（赤シャツ談）とされる高い地位であった当時の中学校教師。それが坊っちゃんの就職先になることも、その職を辞して

「街鉄の技手（中間管理職的な技術職）」に転職できたことも、この高学歴と無関係ではないのだ。

坊っちゃん家は「元は旗本」だと坊っちゃんは言う。だから、維新後もそれなりの資産があった。実際、父親の死に伴って、兄が相続金の一部である六〇〇円を坊っちゃんに渡し絶縁していく。坊っちゃんは、これを三年間の「物理学校」の学資とする決意をした。年間二〇〇円は、当時の授業料や生活費等の必要経費として、かなり正確な数字である。「学歴」に投資することによって、新時代を生きていこうする明治人の姿を描いたのである。

やはり、坊っちゃんを「低学力で短慮、無鉄砲で無計画」な若者のごとくとらえることは、『坊っちゃん』の読みを浅くする。

坊っちゃん先生は無免許先生

『坊っちゃん』のなかで、坊っちゃん先生が生徒の指導をする場面は少ない。しかし、その各シーンは、なかなか過激だ。

生徒が「もう少しゆっくりやってくれ」と要求しても、数学の授業を「べらんめい調」でまくし立てる。幾何の難問を質問されたがそれが解けない。すると、これができるくらいなら、「こんな田舎へ来るもんか」との暴言だ。前

ということとは、教科教育法も生徒指導法も学ばず、むしろ教育実習（当時は実地授業）も未体験なのだ。養成教育を受けていない以上、「べらんめい調」の分からない授業をするのも、喧嘩と見紛う指導をしてしまうのも納得できしてしまう。体罰の禁止法令（明治一二年から存在）など、頭の片隅にも置かれていなかっただろう。

ただし、現代なら「無免許教師」は直ちにマスコミ報道されるほど珍しい存在だが、明治三〇年代の公立中学校では、四割程度の「先生」が無資格だったのである。法律的にも許されていた。実際、松山中学でも、明治四〇年代になっても三割を超えていた。中学校教員の養成が間に合わなかった、という当時の教育政策の反映なのだ。だから、坊っちゃんが「無免許教師」として教壇に立っていても、何ら珍しい存在ではないということになる。もとより坊っちゃんは、教師になる気はそれほどなかったのだから。

『坊っちゃん』が、学校を舞台としながらも熱血教師小説にはならず、坊っちゃんが教職に固執しないのも、こんなところに理由があるのではと読めてくる。

『坊っちゃん』再読のすすめ

私は冒頭で、「掲載の仕方とも関係がありそうだ」と記した。中学校の国語教科書に採録された『坊っちゃん』は、

日に大食いした蕎麦や団子の件で囃されれば、自ら授業放棄してしまう。そして、宿直当番の日のバツ事件。このときの生徒対応は、自制心の働かない子どもの暴力的暴走行為のようであった。

漱石は、教師としての自覚や専門性を、坊っちゃんには身につけさせないまま教壇に立たせたと思えない。

では、それを検証するために、当時の教員免許取得制度を概観してみよう。坊っちゃんが教職にあった明治三〇年代に限定すれば、中等教員免許を取るための方法には以下の三つがあった。

①高等師範学校や国の指定学校（帝国大学など）を卒業すること。

②文部大臣が許可した学校（東京専門学校や慶應義塾など）を卒業すること。

③「文検」と呼ぶ教員資格試験に合格すること。

狸校長や赤シャツは①に該当するだろう。「物理学校」が②のような「許可学校」に認定されたのは、大正六年。漱石が死去した翌年である。また、『坊っちゃん』を何度読み返しても、「文検」に関係する記述はない。すなわち、坊っちゃんはその方法にも当てはまることなく、教員免許状のない「無免許先生」として教職に就いていた可能性が高い。

あの「親譲りの無鉄砲で」で始まる第一章のみである。確かに、坊っちゃんの性格や生き方を浮き彫りにする章だ。ただ、ここだけで『坊っちゃん』を読んだ気になるのは、実にもったいない。明治時代の事実描写の正確さ、計算し尽くされた細部の設定、人物造形の巧みさ、ユーモアに包んだ社会風刺の鋭さ、維新後の人々の葛藤や哀感、全文の読了と再読でしか見えてこない。

晩年の漱石が自身の作品を読み返して、「一番気持ちよく読めた」と語ったのは『坊っちゃん』だった。その後は、新聞連載の形式に縛られた漱石にとって、思いの丈を存分にぶつけた『坊っちゃん』の伸びやかさは、魅力だったのかもしれない。しかし、その伸びやかさの奥に、多くの「コード」を漱石は埋め込んだ。その「漱石コード」を見つけ出す作業もまた、「なんど繰返してもあきない快楽」なのである。漱石は、やはり一流のエンターテナーなのだ。

中学教科書で『坊っちゃん』の第一章を、高校教科書で『こころ』を解説したら、次は生徒に、『坊っちゃん』全篇で「漱石コード」探索に挑戦することを勧めていただきたい。できれば、「もう少し大人になったら、再度読み直してごらん。『坊っちゃん』を通じて、自分自身を見つめることもできるようになるから。」というメッセージを添えて。

教養科目としての『源氏物語』

木村 朗子 きむら さえこ

津田塾大学文学部教授

大学の、日本文学専攻でもない学生を対象に、教養としての古典文学を講じている。講義にやってくる学生は津田塾大学の国際関係学科、英文学科、数学科、情報科学科に属する学生たちである。そうした学生たちの興味を惹きつけ、関心を持たせ、最終的には『源氏物語』を読んでみたいと思ってもらうのがこの授業の眼目だ。そんな教養科目に何ができるのかということについて、私はかなり楽観視している。というのも、私自身、大学時代は外国語学部に属し、アメリカ文学で卒業論文を書いたものの、教養科目としてあった日本古典文学に魅せられて、卒業後、日本文学に転じたクチだからだ。自分がそうであったように、たった一コマの授業がきっかけで生き方を変えるようなこと

よりもっと多かった。『とりかへばや物語』を翻案した小説、氷室冴子『ぎ・ちえんじ』があったし、『落窪物語』は田辺聖子『舞え舞え蝸牛』で、『枕草子』は同じく田辺聖子の『むかし・あけぼの』で楽しんだ。平安宮廷を舞台にした氷室冴子『なんて素敵にジャパネスク』などはテレビドラマにもなった。テレビドラマといえば、一九八一年には沢田研二が光源氏を演じた『源氏物語』の放送もあった。夏休みに泊まりにきていた四つ上の従姉が母の持ち物だった与謝野晶子訳『源氏物語』の箱入り本を読みふけていた姿も臉に焼き付いている。彼女は天津皇子の悲劇を私に語って聞かせてもくれて、古代世界の楽しみ方を教えてくれた。

『円地文子の源氏物語』（集英社、一九八五年）という訳版が三巻本として出ると、真っ先に読み始めたクラスメイトが、興奮ぎみに顫末を語って聞かせてくれたりもした。そんなふうにならば、出版業界にもテレビにも古典文学の世界が溢れていた時代だった。

ここに挙げた本の多くは現在絶版状態なのだが、そういうものが、今の学生たちにもあるのだろうかと思う。期待されるのは、二〇一四年末から刊行されている池澤夏樹編集の日本文学全集（河出書房新社）だろうか。当代一の人気作家による現代語訳で『土佐日記』『更級日記』の日記

が起らないとも限らないと信じているのである。

アメリカ文学を専攻することにしたとはいえ、中学、高校時代の国語は大好きな授業の一つだった。新しい教科書を手に入れば、どんな作品が入っているのかを真っ先に確認したものだったし、『国語便覧』を引っ張り出しては眺め、未知の作家との出逢いをさぐったものだった。だから、国語の先生には感謝ばかりで、取り立ててお願いしたいことも注文もない。

ただ思い返せば、私の場合、国語科の授業以前に、古典文学への興味が十分にあったように思う。それをあらかじめ用意してくれたのは、数々の古典作品にまつわる読み物で、私の高校生時代には、古典文学にふれる機会がいま

ものの、『伊勢物語』『堤中納言物語』に『枕草子』『源氏物語』も含んだ教科書でもおなじみの古典文学作品が続々刊行されている。

講義では、とくに現代に古典文学を読むことには意味があるのだということを強調するために、世界文学という視座やジェンダー論などの議論を取り込んでいく。これは本講義を受講する学生たちが英米文化に目が向いている英文学科と、日本以外の海外のことを勉強したいと思っている国際関係学科に属している人が大半であることも大きい。海外に目を向けている学生に『源氏物語』を読む意味を見出してほしいとまずは考えている。

世界文学というのは、ここ数年よく聞かれるようになった概念だが、私は、翻訳によって拡散し、他国の文学作品にすでに抜き差しならない影響を与えている文学作品という意味で用いている。たとえばドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』は日本でも文学にかかわる人なら多くの人が読んでいる、よく知られた作品だが、その邦訳者でもある亀山郁夫が日本を舞台に『新カラマゾフの兄弟』を書いている。ここまであからさまな影響関係がなくとも、小説家の多くは、外国文学も読んでいくわけだから、それが自ずと作品のなかに沁みこんでいるに違いないと思うのだ。それは書き手だけの問題ではなくて、読み手にも経験

のあることだろう。たとえば私は『源氏物語』を読みながら、どこかで貴族社会の描かれたフランス文学を想像していたりすることがある。そのようにして、一人の読書歴のなかにはありとあらゆる世界の文学が積みこまれていて、それらの影響ぬきにして、もはや読むことも書くこともできない。私の師匠が「日本語に翻訳されている文学は、全部日本文学です！」と言ったことがあったが、まさにそのとおりだと思う。日本文学のなかに翻訳された各国文学が滲んでいる。そんな文学の状況を世界文学とよんでいるのである。

とはいえ、説明の便宜上、わかりやすい影響関係にあるものを例に挙げることになる。一例としてマルグリット・ユルスナールがフランス語で書いた「源氏の君の最期の恋」『東方奇譚』所収がある。『源氏物語』を翻訳で読んだユルスナールが、光源氏の最期を想像してフランス文学として著す。そんな国を超えた文学の連鎖が興味深いと思うのである。

次に大事にしていることは、教室で読んでいる本文の説明である。古典文学作品に、いくつものバリエーションがあることを学生はふつう意識していないし、そこに活字化されたものが唯一絶対だと信じ込んでしまいがちである。岩波書店の新日本古典文学大系本を使うと、校訂のこと、もと

の手書きの状態などが見えやすくなるので、とつつきにくいテキストではあるとは思いますが、あえてこれを使用することになっている。凡例を説明すると、手書きの本文における仮名遣いや当て字の特徴、清音濁音の区別のない表記など、いまの日本語の規則とはちがった書き方がみえてくる。

教室では、まず原文を朗読し、それについて解説を加えるかたちで進めている。現在とは異なる宮廷社会のルールや性のシステムを説明すると同時に、現在にも通じる感覚を拾い出そうとした。たとえば、人名ではなく、役職名や住居のあるところの地名で人物呼称することは、現在の小説に慣れている読者には読みにくい部分である。けれども、近所の家を屋号で呼んだり、地名で名指したりすることは、少し前の時代までごく一般的に行われてきたし、そもそも相手の名前を呼ぶのは失礼であるかのような感覚をまだ持っている人はいる。そうした感覚的に共有できるところを掘り起こしながら、日本語の特徴をつかんでもらうことを心掛けた。白い歯をみせてにつこり笑うというのもアメリカ文化の影響以前の日本にはなかったはずで、そんなところから鉄漿（てつじょう）という文化を理解できるのではないかと思う。

なかでも熱を入れているのは、九〇年代に入って言われるようになった光源氏レイプ魔説についての反論である。

フェミニズムは初期の頃、男性優位社会の矛盾を突き、男性を糾弾するものだと考えられていたとみえて、一部のフェミニスト嫌いには、そんな男性糾弾型の間違った認識が刷新されぬままにあるようである。その裏がえしとして、男性自らが男性であることを反省するふるまいがあった。

実社会で男性が反省的であることはなんら問題はないのかもしれないが、研究の場では、あまりに見当違いで全く困ったことであつた。その流れで出て来たのが、光源氏はひどい、ほとんどレイプまがいの恋愛をしているではないかといった議論である。そして一時期はそれこそがフェミニズムだということになっていったようでもある。こうした議論は結果的に、『源氏物語』などというくだらないモノにかかわらなくてもよいという雰囲気をつくり、同時にまたフェミニズムは害悪であるかのような印象を与えたのではないかとも思っている。実際、『源氏物語』研究において、フェミニズム批評やジェンダー論による分析は近代文学研究と比べて低調である。

ことの発端は、空蟬と光源氏の関係におけるレイプ説にあった。今井源衛「女を書く物語はレイプからはじまる」と題した論文がきっかけとなる。この論について、源氏物語研究は、真正面から反論することなく、困ったことだといった体で流していたように思う。例えばその頃に新訳と

して出た瀬戸内寂聴による現代語訳も、その説を支持するものであったが、せつかくの労作をとりたてて批判する人もいなかった。

『源氏物語』がそのような行爲を描くものならば、むしろ教育の現場で読むべきではない。空蟬が光源氏に犯されたというならば、その後空蟬が、光源氏を思い続けていたこと、身分差を憂えていたことをどのように説明できるというのだろうか。その後の空蟬の心情を思えば、嫌々嫌々も好きのうちといったような、それこそ男性に都合の良い解釈を成り立たせしてしまうことになる。犯されても最終的には女は喜んでいるのだという物語展開になってしまうのだから、レイプ説とは、それを糾弾するようであり、実は肯定することになってしまうわけだ。光源氏はレイプをしたのではない。そう見えろとするなら、当時の婚姻習俗の違いを説明しなければならないのだ。

今年の一月に『女子大で『源氏物語』を読む―古典を自由に読む方法』（青土社 二〇一六年）を上梓した。ちょうど半期分の講義を収録したものだ。願わくは、本書が、古典の授業のための、なにかのヒントになればうれしいし、なによりも若い学生に読んでほしいと思う。

句法指導の心得

——四大句法② 受身

塚田 勝郎
つかだ かつろう
筑波大学附属高等学校教諭

1 使役の形の再確認

前回扱った使役の形について、一点だけ補足しておきます。使役の形の訓読を誤って覚える生徒が、例年一定数います。具体例をあげると、「使_二人_一読_二」を「人をして読ませしむ。」と読んだり、「令_レ写_二」を「写させしむ。」としてしまうのです。

使役の形は、一般に「使_二AB_一」(AをしてB(せ)しむ。)」とパターン化して説明します。助動詞の「しむ」は未然形接続であり、漢文訓読には「愛す」「論ず」のようなサ変動詞が多く出てくるところから、「B(せ)しむ」と表記するのですが、「動詞の未然形に『せしむ』を添えればよい」と早合点する生徒がいるようです。あるいは、近ごろはやりの「文書を読まさせていただく」のような、「サ入れ」表現の影響があるのかもしれない。

ようか。「型」がいくつもあって、教えるのも覚えるのも大変だから、というのは一面的な理由でしかありません。説明のために、『史記』項羽本紀の「四面楚歌」の一節を抜粋してみます。

項王_チ則_チ夜_チ起_チ飲_ス帳_ニ中_ニ有_リ美人_ハ名_ハ虞_グ常_ニ幸_ニ從_ニ。駿_{セウ}馬_マ名_ハ騅_ス常_ニ騎_ニ之_ニ。

右の部分を句法的な視点で観察すると、動詞「幸す」を、「見」「被」「為」などの受身の助字がないにもかかわらず、「幸せらる」と読んでいる点が目立ちます。では、「幸す」を受身に読む根拠は、どこにあるのでしょうか。試みに「有_リ美人_ニ」以下の部分を、次のように図式化してみます。

有_二美人_一、名_ハ虞_グ。常_ニ幸_ニ從_ニ。
駿_{セウ}馬_マ、名_ハ騅_ス。常_ニ騎_ニ之_ニ。

項羽と、彼の最も身近な「従属物」であった「虞」「騅」との関係が、対句によって対比的に示されていることに気づかれます。

ここで、「幸す」の主語を考えてみます。この語と対の関係にある「騎る」の主語が項羽であることは明らかですから、「幸す」の主語も項羽と考えて間違いないはずですが、項羽を主語と考えると、「常に幸して従はしむ。」と訓読で

いずれにしても、「せ」を補う意図を丁寧に説明する必要があります。その際、次のような練習問題も有効でしょう。

【問】次の各文を訓読せよ。

范增使_二項_一莊_ニ殺_ス沛_ニ公_ニ。

↓ (范增 項莊をして沛公を殺さしむ。)

范增使_二項_一莊_ニ殺_ス害_ス沛_ニ公_ニ。

↓ (范增 項莊をして沛公を殺害せしむ。)

「殺す」は四段動詞ですから、「殺さしむ」と接続し、「殺害す」はサ変動詞ですから、「殺害せしむ」と接続します。「殺させしむ」とはならないことを、しっかり認識させたものです。

2 受身の形を学ぶ意味

句法の学習の中で、受身の形が重視されるのはなぜでし

きます。一方、伝統的な訓読では、「常幸」の主語を虞美人として、「虞美人はいつも寵愛されて、項羽のお供をしていた。」という解釈に立った読みが行われています。

○〈項王を主語として〉

(項王は) 常に(虞美人を) 幸して従はしむ。

|| 使役の助字がないにもかかわらず、「しむ」を添えて「従」を使役の形に読んでいる。

○〈虞美人を主語として〉

(虞美人は) 常に(項王に) 幸せられて従ふ。

|| 受身の助字がないにもかかわらず、「らる」を添えて「幸」を受身の形に読んでいる。

このことからわかるように、使役の形と受身の形とは表裏一体の関係にあり、どちらの形も主語の確定と深く関わります。「受身の形はなぜ大事なのか」という疑問に対しては、受身の形への習熟が動作の主体の確認につながるから、と答えることができます。

3 指導の実際

今回も高校三年生用の「受身の形の総まとめ」のプリントを用いて、能率的な指導法を考えてみます。指導時間は、一時間を想定しています。

受身の形とは、「…に…される」という意味を表す形。
基本的な形は、次の四つのタイプに分類される。
文語の助動詞「る・らる」の活用と接続を覚えておくとう
利である。

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	接続
る							
らる							

■タイプ1 受身の助字「見」「被」を用いる形

薄者 見 疑。↓
吾 嘗 三 仕 三 見 逐 於 君。↓
被 驅 不 異 犬 与 鶏。↓
■タイプ2 受身の助字「為」「為所」を用いる形
身 為 宋 国 笑。↓
厚 者 為 戮。↓
若 属 皆 且 為 所 虜。↓

この種のプリントを作る際には、次の四点に注意する必
要があります。

- 1 生徒が作業しながら知識を吸収できるようにワー
クシートのスタイルに仕上げる。
- 2 一時間の授業内で完結するように構想する。
- 3 文例はできるだけ既習の教材から選ぶ。初出の文
を掲げる際は、書き下し文と現代語訳を添える。
- 4 参考書ではないので、瑣末な知識は省く。

■タイプ3 受身の助字「於」を用いる形

以 節 儉 力 行、重 於 齊。↓
祗 辱 於 奴 隸 人 之 手。↓

■タイプ4 文脈から判断して受身に読む

誹 謗 者 族、偶 語 者 棄 市。
↓誹謗する者は族せられ、偶語する者は棄市せらる。
圓石の文で、受身を表す助字がなくても受身の形に読む理
由を考えてみよう。

※「受身を暗示する文字がある場合は、受身に読む。」と説
明されることがあるが、あまり現実的ではない。念のために
「受身を暗示する」とされる文字の例をあげておく。

封 封ぜらる 任 任ぜらる 補 補せらる
左遷 左遷せらる 誅 誅せらる

プリントの内容に従って、受身の形の指導内容を見てい
きましょう。

(1) 助動詞「る・らる」の接続の違いを意識させます。

る……四段・ナ変・ラ変の未然形に接続。
らる……それ以外の活用の未然形に接続。

中には「古文の時間じゃないのに……。」とつぶやく
生徒もいるかもしれませんが、漢文の訓読は文語訳であ
ることを思い出させる絶好の機会です。

(2) タイプ1では、「見」「被」の順にこだわりましょう。

というのは、受身の助字という真先に「被」を想起
する生徒が多いのですが、実際には「被」を用いた受身
の文は多くありません。ここでも「る・らる」の使い分
けを思い出させます。「疑ふ」「逐ふ」「驅る」はいずれ
も四段に活用しますから、「疑はる(こと)」「逐はる(こ
と)」「驅らる(こと)」と訓読することになります。
ただし、「驅らるる」は「驅・らる・る」という錯覚を
招きやすいからです。丁寧な説明が必要でしょう。
(3) タイプ2については、同じ「為」を用いながら、一文
目と二文目では「為」の読み方が異なることに疑問を持
つ生徒がいるはずです。この疑問に対しては、次のよう
に説明するとよいでしょう。

○身為宋国笑。

「身は宋国の笑ひと為る。」が一般的だが、「身は宋
国に笑はる。」と訓読することも可能。

○厚者為戮。

「厚き者は戮せらる。」が一般的だが、「厚き者は戮
するところと為る。」と訓読することも可能。ただ
し、この文はタイプ1の「薄き者は疑はる。」とセッ
トであるため、通常は「戮せらる」と訓読される。

(4) タイプ3でも、「る・らる」の使い分けを確認しまし
ょう。「重んず」はサ変ですから「重んぜらる」と接続し、
「辱かしむ」はマ行下二段ですから「辱かしめらる」と
接続します。

(5) タイプ4の例文には動詞が複数あり、それぞれの主語
は二種類に分類できます。

民が皇帝を「誹謗す」。皇帝が民を「族す」。
民が(皇帝のことを)「偶語す」。皇帝が民を「棄市す」。
使役の項でも触れたように、一文に主語の異なる動詞が
二つ存在するという漢文特有の現象が、ここにも見られま
す。この文では「誹謗者」「偶語者」という形で主格が明
示されていますから、二つ目の動詞「族」「棄市」は「族
せらる」「棄市せらる」と受身に読むことになります。

なお、プリントにも書いたように、「受身を暗示する文字」
については、軽く触れる程度でよいでしょう。

今回は疑問と反語の形を取りあげます。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができ
ます。次回は「WEB国語教室」に7月頃アップする予定です。

冷めたビールはまずそうです

冷えたビールを豪快に一気飲みするテレビコマーシャルを見て、喉ごしの爽快感を思う人は少なくないでしょう。でも、あのビールが、「冷めたビール」だったとしたら…これは考えただけでも気持ち悪いですね。

冷蔵庫から出したビールを「よく冷えてる」とは言っても「よく冷めてる」とは言いません。熱いお茶なら「冷めてる」と言えるでしょうが、そもそも冷たいビールに「冷めてる」はふさわしくないような気がします。

でも、お茶よりずっと熱いのに、マグマなら、「冷めて岩になる」と言うとなんだか変で、ビールと同じく「冷える」を使いたくなります。

「冷える」と「冷める」の意味はどのように違うのでしょうか。

「冷える」と「冷める」、「上る」と「上がる」、「きれい」と「美しい」、「海外」と「国外」など、意味や使い方の似通った類義語の違いを調べるには、こ

れらがどのような言葉と一緒に使われてどのような意味を表すのか、用例をたくさん集めて調べてみるのが有効です。いろいろな場面を思い浮かべて用例を考えたり、実際にどのように使われているのか調べてみたりすると、似通った言葉でも違うタイプの言葉とよく使われて、微妙に異なった意味を表すことに気付きます。

最近では、日本語の話し言葉や書き言葉を大量に集めて電子化したコーパスが次々に開発され、直観で考えたり自分で調べたりするよりはるかに多くの用例を、一瞬のうちに集めることができるようになりました。そこで、以下では一億語の日本語を集めた『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』を検索するNINJAL-WP for BCCWJというツールを使って、「冷える」と「冷める」の使い分けを調べてみます。このツールは、問題の語がどのような語とともに使われるかを頻度順や統計値順に示してくれる大変便利なツールで、使い方も簡単です。使

い方は、左記のサイトの右上にある「操作説明書を開く」をクリックしてご覧下さい。

<http://nlb.ninjal.ac.jp>

「冷える」も「冷める」も自動詞で、「〇〇が冷える／冷める」という形で使われることが多いと思います。そこで、この形で使われたときの「〇〇」にどんな名詞が多く使われているかを調べてみます。

まずは「冷える」から始めましょう。圧倒的に多いのは、「体」「足」「お腹」「手足」「腰」のような身体に関わる名詞です。それ以外では「空気」「マグマ」「地球」「エンジン」など、具体的なモノを表す名詞が多く、「気持ち」や「愛情」などの抽象的なモノを表す名詞は、種類も頻度も限られます。

一方、「冷める」のほうは、「熱」「気持ち」「酔い」「愛情」「興奮」といった抽象的な名詞が上位に挙げられます。具体的な名詞としては「お湯」「料理」「紅茶」など、飲み物や料理に関する名詞が多く、身体に関する名詞は「体」と「唇」しか見つかりません。

次に、「冷える」にも「冷める」にも使える「体」の例を取りあげることしましょう。

「体が冷える」は「通常の体温以下の冷たいと感じられる温度になる」という意味ですが、「体が冷める」は、「暖まった体の温度が下がる」という意味です。つまり、「冷える」は「元々の温度からさらに下がること」、「冷める」は「高い温度から元々の温度に下がること」を表しているのです。「マグマが冷める」と言いにくいのは、マグマの場合、元々の温度自体が非常に高いので、それ以上に高い温度から元々の温度に下がることは考えにくいからです。

一方、抽象的な名詞の場合は、「景気が冷える（×冷める）」「興奮が冷める（×冷える）」のような使い分けがあります。このことから、「冷える」は「元々の状態から悪化すること」、「冷める」は「高いレベルにあった状態が元々の状態に戻ることに」という意味であることが分かります。

砂川有里子

筑波大学名誉教授 『明鏡国語辞典』編集委員



『版画平家物語』 井上員男

紙凹版画家・井上員男^{みづお}さんが、『平家物語』の無常の世界を表現した『版画平家物語』「十 扇^{あふ}の的」より、那須与一。義経の命を受け、平家の船に立てられた扇^{あふ}の的を射ようと、海中から狙いを定める。見事射当てて喝采を浴びる場面ではなく、「これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人に二たび面^{おもて}をむかふべからず」と決心し、今まさに矢を放たんとする緊迫の瞬間を描いた。独特の斜線で表現されたうねる波も印象的である。

*WEB国語教室の連載「井上員男『版画平家物語』の世界」もご覧ください。
www.raisshukan.co.jp/kokugo/webkoku/

石川忠久 著

石川忠久 漢詩の稽古



四六判・並製・二五六頁
定価Ⅱ一八〇〇円十税

評者Ⅱ池澤一郎
早稲田大学文学部教授

日本語から漢字、漢語は除去しないので、漢字、漢語の精確な運用能力を維持向上させねば、日本語は崩壊する。新井白石、荻生徂徠といったかつての政治家は漢詩漢文を作ったから、精確な和文を書き綴った。

本書は岳堂石川先生が主催する漢詩道場稽古の記録三十年分の精髓である。新旧の門下生が満を持して寄せた漢詩が、岳堂先生の添削によって、より見事な作品に生まれ変わる。改稿後の自作を目にし、改めて漢字、漢語の精妙な働きに瞠目する参

加者の表情が目には浮かぶ。岳堂先生は添削をする理由を諄々と説いて止まないが、「理屈にあわない発想は慎む」「主題を生かすための舞台を作る」「既にわかっていることはわざわざ言わない」等々の理由は、作詩の心がけを超えて、人生哲学の趣を呈する。

漢字、漢語の精確な運用能力を備えれば、見事な日本語の書き手となれ、さらには岳堂先生のごとき君子人たりうることは、門人諸氏が本書に添えた名文がこれを保証している。

串田久治・諸田龍美 著

漢詩酔談

酒を語り、詩に酔う



四六判・並製・二二四頁
定価Ⅱ本体一八〇〇円十税

評者Ⅱ守本哲也
岡山県立玉野光南高等学校

本書は、酒を詠み込んだ漢詩を「肴」にした、著者のお二人の対談が収められている。どの対談も、実際に一杯やりながらなされたのではないかと思われるぐらゐり軽快なテンポで進められるが、随所に「深イイ」話がちりばめられており、それが実に絶妙なバランスなのである。

また収録されている三十首の詩には、それぞれ独特のわかりやすい訳も添えられている。圧巻は最後にある于武陵の「酒を勧む」である。井伏鱒二の名訳の向こうを張って、新たな「名

訳」がなされている。これだけでも一読の価値があるだろう。選挙権も十八歳から認められることとなり、そのうち喫煙や飲酒も十八歳から認められるようになるかもしれない。われわれ高校の教員は、本当の「大人のふるまい」について、生徒たちにこれまで以上に教えてやらなければならぬだろう。

ではこの本を、その材料として活用しようか。いや、その前にまずはこの本を「肴」にして一献傾け、「明日への活力」とすることにしてしよう。

大修館書店編集部 編

赤ちゃんの名づけ事典



A5判・並製・四一六頁
定価Ⅱ本体一八〇〇円十税

評者Ⅱ中楠玲

『大漢和辞典』『新漢語林』などの漢和辞典を刊行する、大修館ならではの名づけ事典だ。

全七章のうち、「漢字からさがす」の章を開くと、名前に使える漢字の読みや意味、画数、その字を使った名前の例などが並ぶ。解説は非常に詳しく、簡単な漢和辞典としても使えるような

ほど。名づけ事典でありながら漢字の解説にも手を抜かない姿勢は「硬派」とも言えるが、この硬派な解説こそが、名づけのヒントともなるのである。

たとえば、「大」の項目。「意

味」欄の①～⑥の意味を追っていくと、「おおきい」以外にも

「優れている」「重要である」など名づけに活かせるような意味を見つけることができる。また、「香」の項目には「薫」との意味の違いの解説があり、漢字を選ぶ際の参考にできる。

意味の似た漢字を集めた「類義」欄、その字を使った言葉を紹介した「ことば」欄などもあり、眺めているだけでも名づけのアイデアが湧いてきそう。装丁も可愛らしく、贈り物としても喜ばれそうな一冊だ。

佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄 編著

レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド

大学生・大学院生のための自己点検法29



A5判・並製・一六〇頁（予定）
予定価格Ⅱ本体一六〇〇円十税

評者Ⅱ小崎祐子

本屋に行くと、論文やレポートの書き方を指南した本がたくさん並んでいる。しかし、それらをよく読んだからといって必ずしもよい文章が書けるとは限らないということは、日々学校現場で文章指導をされている先生方はよくご存じだろう。スポ

ーツでも楽器でも、正しいフォームを頭で理解するだけでなく、実際にやってみて、その問題点を把握し、改善のための技術を身につけ、何度も繰り返し定着させるというステップを踏むことが上達のための唯一の

方法であり、それは文章の書き方でもまったく同じだ。

本書は、早稲田大学に開設されているライティング・センターで実際に指導を行っている文章指導員による、論文・レポートの自己点検法が示されたテキストである。センタリーに蓄積されたノウハウをもとに、書き手が抱える悩みや陥りやすい過酷の実例を取り上げ、問題点と改善の方法を具体的に解説する。学生・生徒が自分の文章のレベルをぐっと上げるためのよい参考書になるだろう。



人類は未知の領域に挑戦してきたからこそ、文明を築き上げてきた。新たな技術を生み出し、文化の深層を掘り起こしてきた。人間とは、挑戦し続ける存在である。挑戦することこそが、人間の存在理由。挑戦することをやめてしまったら、人間は人間以外の何ものかになってしまうことだろう。

（茂木健一郎「挑戦」より）

『精選国語総合 新訂版』（国総 346）前見返し写真

【撮影日時】1991年8月1日頃 【撮影場所】パキスタンのギルギット・バルティスタン州。ヒマラヤ山脈西部にある世界第9位の高峰、ナンガ・パルバット(8,125m)のルパール壁 6,500m付近にて。【被写体と状況】写っている人物は、登山隊メンバー8名のうち、最も若かった角田忠(当時26歳)。C3(6,020m)からC4(6,690m)までの急な雪壁に張ったフィックスロープをユマーリングして登っているところ。

「挑戦」に寄せて

梶山 正

好きなことには夢中になれるし、思いきって挑戦できる。僕は山登りが好きだから写真を撮るようになったのか、写真が好きだから登山を続けているのだろうか。おそらく、どちらも好きなのだろう。

小学生の頃は昆虫狂いで、いろいろな種類の虫を捕まえて標本をたくさん作っていた。捕虫網を片手に、近所の野山を歩きまわっているうちに、山歩きが好きになったのだろう。高校に入ると山岳部に入部した。いつか日本アルプスの冬山や岩壁も登ってみたいと憧れを抱くようになった。

高校三年生になると、周りの友人たちは大学に入るための受験勉強で忙しい。でも、僕は世の中を斜めに見ていた。「公式を覚えこんでテストでいい点をとっても、将来の僕の人生に何の役に立つのだろうか？」今考えると、屁理屈をこねて受験勉強から逃げていたのかもしれない。工作や絵が得意だった

絵を描いて過ごしていたが、そのうち絵を描くことに行き詰まりを感じた。変わらない日常に変化がほしくなり、休日には登山に出かけるようになった。

再開した登山は僕を夢中にさせた。休みの日は必ず山へ行き、タマネギを炒めているときでも、登山のことで頭が一杯だった。週一日の休みでは行きたくない山へ行けないので、アルバイトを雇うようになった。山には必ずカメラを持っていった。絵筆からカメラに、自分を表現する道具が変わったのだ。「カメラを作っている時間があったいな。登山と写真だけに時間を使いたい」と思いながらも、生活のためにカメラを作り続ける日々が続いた。

三〇歳のとき、ナンガ・パルバット登山隊に参加することを決めた。なじみの登山用品店の店員がそれに参加することになり、僕を誘ってくれたのだ。それまで僕は、ネパールやパミールの六〇七千m峰に三回ほど行っていた。ナンガ・パルバットは世界に一四座ある八千m峰の中で、危険でかなり難しい。しかも隊長は、その中でもまだ一登しかされていない厳しいルートを選んでいった。僕はトレーニングで励んで、一九九一年六月上旬にパキスタン行きの飛

ので、一切勉強せずに芸術学部美術科のある大学に入学した。ところが、美術の授業に出て、学生たちが楽しくお絵描きしているようにしか思えない。「こんな時間、もったいないな」と思い、退学した。

福岡から京都に出てアルバイト生活をするうちに、インドを放浪してみたいと思うようになった。日本の若者の多くが、インドに目を向けていた時代だ。レストランで料理人として働き、お金を貯めた二三歳のとき、僕はインドへ旅立った。「必ず自分を変えろ何かが見つかるはずだ」と信じて約八か月間さまよったが、僕は以前の僕と同じであり、何も変わらず焦りを感じ始めていた。

そうこうするうちに、料理人の経験を見込まれて、インドの旅で知り合った日本人の坊さん二人と、インドカレー屋を始めることになった。ところが、この坊さん二人は「タマネギの皮をむくと涙が止まらない」などという理由で去っていった。僕に残ったのは、小さな店と借金だけである。客は少なく、一人でやっていくのが精一杯だ。週に一度の休みは、

行機に乗った。

七九五〇mまで登って僕たちは敗退した。僕は登山隊の中で最も高いところまで登ったが、頂上までの高度差はまだ一七五mも残っていた。僕の体調は良かったが、パートナーの角田君（写真に写っている人）が「息が苦しい！ 死ぬかもしれない！ 先に降りる！」と叫んで、一人先に降りていった。「あれれ?！」と、あっけない終わりに驚いたが、しつこく登り続けていたら、今ここにいないかもしれない。

写真家になることを夢見ていた僕は、帰国後、この登山で撮った写真をフォトコンテストに出してみた。そして、銀賞という通知をもらった。それがこの写真だ。これによって、僕の職業が変わることになる。自信と勇気を得た僕は、登山雑誌の出版社に自分の作品を持って営業に向かった。それからポツポツと写真の仕事が来るようになった。食えないかも？と心配していたが、なんとか食って二五年が経つ。写真の仕事をするようになって「こんな時間、もったいないな」と感じられることは一度もない。好きなことには夢中になれるし、思いきって挑戦できと思う。

梶山 正（かじやま ただし） 山岳写真家。1959年生まれ。山岳小説『孤高の人』を読んで感動し、本格的な登山を始める。28歳でヒマラヤ登山を経験、31歳のときにナンガ・パルバットで本作品を撮影、これが富士フィルムのコンテストで銀賞を受賞し、山岳カメラマンとして活動を開始。『岳人』『山と渓谷』などで活躍。妻はハーブ研究家のベニシア・スタンリー・スミスさんで、妻の著書『ベニシアのハーブ便り 京都・大原の古民家暮らし』『ベニシアの庭づくり』などにカメラマンとして参加。